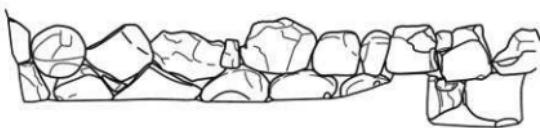


仙台市文化財調査報告書第500集

仙 台 城 跡 17

— 令和 3 年度 調査報告書 —



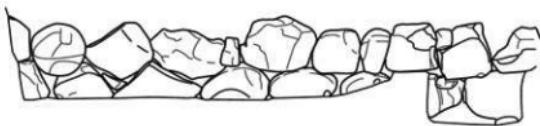
2022年4月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第500集

仙 台 城 跡 17

— 令和 3 年度 調査報告書 —



2022年4月

仙台市教育委員会



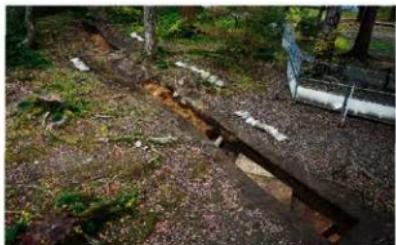
第38次調査2区 全景（南東から）



第38次調査2区 KS-1193 石垣（北東から）



第38次調査2区 根石検出状況（南東から）



第38次調査1区 全景（南東から）



第39次調査1区 全景（北東から）

卷頭図版 2



第39次調査2-2区 全景（南東から）



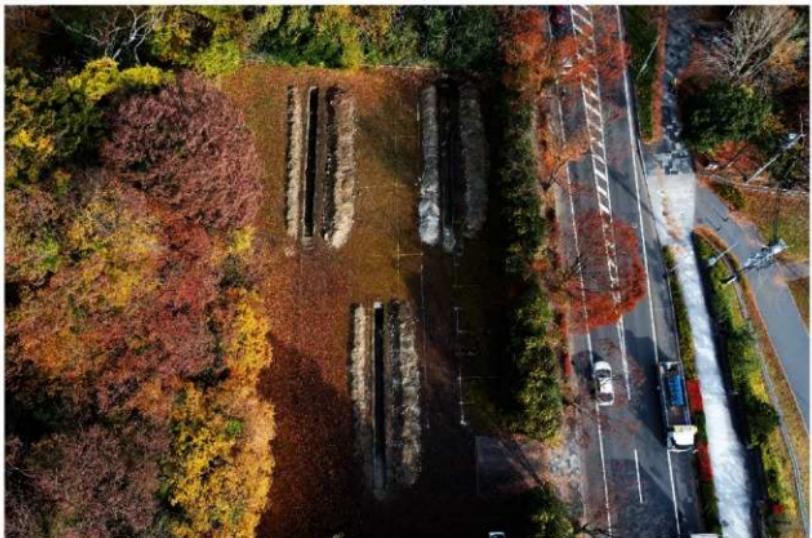
第39次調査2-3区 全景（西から）



第39次調査2-4区 全景（東から）



第39次調査2-5区 全景（西から）



第40次調査調査区 全景（上空から）

序 文

慶長 5 年（1600）に伊達政宗が仙台城の繩張りを開始し、併せて城下のまちづくりをおこなってから四百年余りを経た今、仙台市は人口 100 万人を越える東北地方の中心都市となりました。現在の仙台市発展の原点となった仙台城跡は、ビルが林立する都心部から最も近い緑豊かな場所として、青葉城や天守台といった愛称で市民から親しまれてきました。

仙台城跡は、平成 9 年度から 16 年度までおこなわれた本丸石垣修復工事に伴う発掘調査や、平成 13 年度から始められた国庫補助による学術調査によって、中世の山城であった千代城期や、伊達氏の居城となってからの内容が徐々に明らかとなっていました。これらの発掘調査から得られた成果により、わが国の近世を代表する城郭遺跡であることが評価され、平成 15 年 8 月、国の史跡に指定されました。

平成 23 年に発生した東日本大震災では、仙台城跡の石垣も大きな被害を受けましたが、伝統工法に基づく復旧に努め、文化財としての価値を損なうことなく後世に残すことができました。また、平成 31 年 1 月に「史跡仙台城跡保存活用計画」が策定され、それを受け、史跡仙台城跡の整備および活用の推進を図るため、平成 17 年 3 月に策定された「仙台城跡整備基本計画」を見直し、新たに「史跡仙台城跡整備基本計画」を令和 3 年 3 月に策定しました。それに基づき、今後は「仙台城跡をより城郭らしく地域の誇りと愛着を育む場」になるよう取り組んでまいります。

本報告書は、令和 3 年度の学術調査の成果をまとめたものです。今年度は、登城路跡、東丸（三の丸）土塀、扇坂下の発掘調査を実施し、清水門井戸石垣と巽門西側石垣の測量調査もおこないました。登城路跡では、巽門西側石垣の南側延長部を検出し、江戸時代における巽門前の橋形の形状を知る手がかりを得ることができました。今後の登城路整備に向けた非常に大きな成果と言えます。

最後になりましたが、今回の調査事業および調査報告書の刊行にあたり、多くの方々からご指導、ご協力を賜りましたことを深く感謝申し上げます。本報告書が研究者のみならず市民の皆様にも広く活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

令和 4 年 4 月

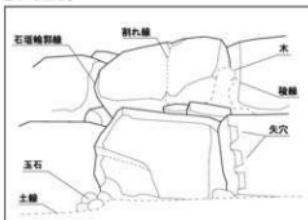
仙台市教育委員会
教育長 福田 洋之

例 言

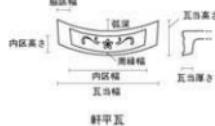
1. 本書は、文化庁の国庫補助事業として実施した、史跡仙台城跡の令和3年度遺構確認調査（登城路跡第5次調査：全体第38次調査、東丸（三の丸）土堀第7次調査：全体第39次調査、崩坂下第1次調査：全体第40次調査、清水門井戸石垣・巽門西側石垣測量調査：全体第41次調査）の報告書である。
2. 本書に関わる史跡仙台城跡の調査については、令和3年4月17日付3受文庁第25号にて文化庁長官の許可を得て実施した。
3. 発掘調査は、長島栄一、関根章義、須貝慎吾、沼倉幸司、吉田大（仙台市教育委員会文化財課）が担当し、整理作業は、須貝慎吾、吉田大が担当した。本書の作成は、I～VIを須貝、吉田が執筆した。本書の編集は須貝が行った。
4. 出土陶器類の鑑定は佐藤洋子に依頼した。
5. 清水門井戸石垣・巽門西側石垣の計測・図化は国際航業株式会社仙台支店に委託して行った。
6. 調査成果については既に各種刊行物などで公表されているが、本書の記載内容がそれら全てに優先する。
7. 発掘調査および報告書作成にあたり、次の機関と方々からご指導・ご協力をいただいた。記して感謝する。（敬称略・順不同）
宮城県教育委員会文化財保護課、仙台市博物館、宮城県考古学会、金森安寿、佐藤洋、有瀬舟仁（牛久市教育委員会）
8. 本調査および報告書作成に係わる諸記録や出土遺物などの資料は、すべて仙台市教育委員会が保管・管理している。

凡 例

1. 本書中の地形図は、仙台市作成の現況測量図（1:500）の他に、国土地理院発行の1:50,000『仙台』と1:10,000地形図『青葉山』の一部を使用している。
2. 本書の座標値は世界測地系に基づいており、図中の方位は座標北である。また、高さは標高値で記した。
3. 遺構番号は、全遺構に対して通し番号（国庫補助調査による検出遺構番号：KS- ）を付した。
4. 本報告書の土色については、『新版標準土色帳』（古山・竹原：2001）を使用した。
5. 本書に使用した遺物図版の縮尺は、陶器器類・土器類は1:3、瓦・レンガは1:6、金属製品は1:2を原則としており、その他の遺物は各図中に示している。遺構図版の縮尺については各図中に示している。
6. 遺物観察表の中の法量で（ ）で示した数値は、陶器器類・土器類については推定復元値、その他の遺物については残存値を示している。また、「-」は計測不能を示している。
7. 石垣の表記については以下の図の通りである。



8. 遺物の計測部位については以下の図の通りである。



目 次

卷頭図版

序文

例言・凡例

目次

Iはじめに	1	3. 1区検出遺構	42
II仙台城跡の概要	4	4. 2区検出遺構	44
1. 仙台城跡の地理的環境	4	5. 出土遺物	47
2. 仙台城跡の歴史的環境	4	6. まとめ	47
3. 仙台城跡の発掘調査	5	VI第40次調査(扇坂下第1次)	52
III仙台城跡の発掘調査の実績と計画	7	1. 調査の概要	52
IV第38次調査(登城路跡第5次)	10	2. 扇坂下の変遷	52
1. 調査の概要	10	3. 基本層序	54
2. 基本層序	10	4. 検出遺構	54
3. 1区検出遺構	13	5. 出土遺物	57
4. 2区検出遺構	16	6. まとめ	57
5. 出土遺物	24	VII第41次調査(清水門井戸石垣・巽門西側石垣)	62
6. まとめ	32	1. 調査の概要	62
V第39次調査(東丸(三の丸)土壙第7次)	41	2. 測量成果	65
1. 調査の概要	41	3. まとめ	65
2. 基本層序	42		

報告書抄録

卷頭図版目次

卷頭図版1 第38次調査2区全景(南東から)
第38次調査2区KS-1193石垣(北東から)
第38次調査2区根石検出状況(南東から)
第38次調査1区全景(南東から)
第39次調査1区全景(北東から)

卷頭図版2 第39次調査2-2区全景(南東から)
第39次調査2-3区全景(西から)
第39次調査2-4区全景(東から)
第39次調査2-5区全景(西から)
第40次調査調査区全景(南から)

挿 図 目 次

第 1 図	仙台城跡の位置と周辺の遺跡	2
第 2 図	仙台城跡周辺地形図	3
第 3 図	仙台城跡遺構確認調査・調査区位置図	8
第 4 図	東丸（三の丸）周辺第38・39・41次調査区位置と周辺調査	9
第 5 図	翼門西側石垣の変遷	11
第 6 図	2区断面模式図	12
第 7 図	1区全体平面図	13
第 8 図	KS-1196 排水溝全体図	13
第 9 図	1区平面図・断面図（1）	14
第 10 図	1区平面図・断面図（2）	15
第 11 図	2区近・現代遺構平面図	16
第 12 図	2区平面図	17・18
第 13 図	2区断面図（1）	19
第 14 図	2区断面図（2）	20
第 15 図	2区断面図（3）	21
第 16 図	KS-1193 石垣立面図・オルゾ写真	23
第 17 図	第38次調査（登城路跡）出土遺物（1）	26
第 18 図	第38次調査（登城路跡）出土遺物（2）	27
第 19 図	第38次調査（登城路跡）出土遺物（3）	28
第 20 図	第38次調査（登城路跡）出土遺物（4）	30
第 21 図	第38次調査（登城路跡）出土遺物（5）	31
第 22 図	翼門跡周辺の遺構配置図	33
第 23 図	KS-1193 石垣・翼門西側石垣立面図	33
第 24 図	東丸（三の丸）土壙第7次調査区配置図	41
第 25 図	1区平面図・断面図	43
第 26 図	2-1区平面図・断面図	44
第 27 図	2-2区平面図・断面図	44
第 28 図	2-3区平面図・断面図	45
第 29 図	2-4区平面図・断面図	45
第 30 図	2-5区平面図・断面図	46
第 31 図	第39次調査（東丸（三の丸）土壙）出土遺物	48
第 32 図	扇坂下の変遷	53
第 33 図	扇坂下1次調査区配置図	54
第 34 図	扇坂下1次平面図	55
第 35 図	扇坂下1次断面図	56
第 36 図	第40次調査（扇坂下）出土遺物	58
第 37 図	翼門跡・清水門跡周辺の現況地形図と調査地	62
第 38 図	「奥州仙台城并城下絵図」（部分）	62
第 39 図	天和2年（1682）宮城県図書館蔵	62
第 40 図	清水門井戸石垣立面図・縦断図・横断図	63
第 41 図	翼門西側石垣立面図・縦断図・横断図	64

表 目 次

第 1 表	仙台城の沿革	6
第 2 表	これまでの調査実績	7
第 3 表	調査計画表と調査実績表	7
第 4 表	1区土層注記表	15
第 5 表	2区土層注記表	22
第 6 表	第38次調査出土遺物集計表	25
第 7 表	第38次調査（登城路跡）出土磁器観察表	29
第 8 表	第38次調査（登城路跡）出土陶器観察表	29
第 9 表	第38次調査（登城路跡）出土瓦観察表	32
第 10 表	第38次調査（登城路跡）出土金属製品観察表	32
第 11 表	1区土層注記表	43
第 12 表	2区土層注記表	47
第 13 表	第39次調査（東丸（三の丸）土壙）出土遺物観察表	48
第 14 表	第40次調査（扇坂下）土層注記表	56
第 15 表	耐火レンガ集計表	57
第 16 表	第40次調査（扇坂下）出土遺物観察表	59

写 真 図 版 目 次

図版 1～4	第38次（登城路跡）	34～37
図版 5～7	第38次（登城路跡）遺物	38～40
図版 8～9	第39次（東丸（三の丸）土壙）	49～51
図版 10	第39次（東丸（三の丸）土壙）遺物	51
図版 11	第40次（扇坂下）	60
図版 12	第40次（扇坂下）遺物	61
図版 13	第41次（清水門井戸石垣・翼門西側石垣）	66

I. はじめに

令和3年度は、国庫補助による仙台城跡遺構認調査を下記の体制で臨んだ。

調査主体 仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課仙台城史跡調査室）

調査担当 文化財課 課長 都丸 晃彦 主査（調整担当）長島 栄一

仙台城史跡調査室長 鈴木 隆

主任 大江 美智代

主任 沼倉 幸司

主事 須貝 慎吾

主事 佐藤 恒介

主事 吉田 大

発掘調査、整理作業を適正に実施するために調査・整備委員会を設置し、指導・助言を受けた。

（五十音順）

委員長 藤澤 敦（東北大学 教授）

副委員長 北野 博司（東北芸術工科大学 教授）

委員 奥村 聰子（一般社団法人東北観光推進機構推進本部 本部長代理）

委員 龍橋 俊光（東北大学 准教授）

委員 佐浦 みどり（有限会社東北工芸製作所 常務取締役）

委員 佐々木 貴弘（国土交通省東北地方整備局建設部 都市調整官）

委員 渋谷 セツコ（建築と子供たちネットワーク仙台 副代表）10月まで

委員 堀江 千恵（一般社団法人東北観光推進機構東北ブランド戦略部
統括マネジャー）3月より

委員 永井 康雄（山形大学 教授）

委員 深澤 百合子（東北大学 名誉教授）

仙台城跡調査・整備委員会開催日

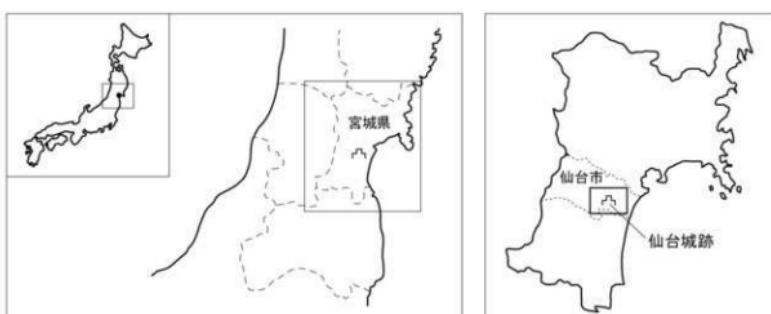
第6回：令和3年8月19日、第7回：令和3年11月25日

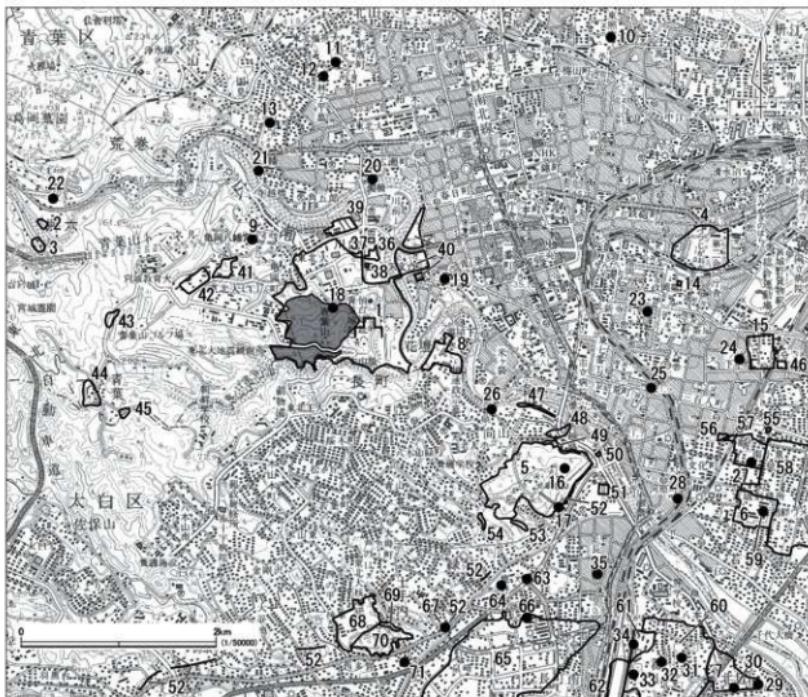
第8回：令和4年3月14日

仙台城跡調査・整備委員会調査部会開催日

令和3年8月4・6日、令和3年10月26・28日

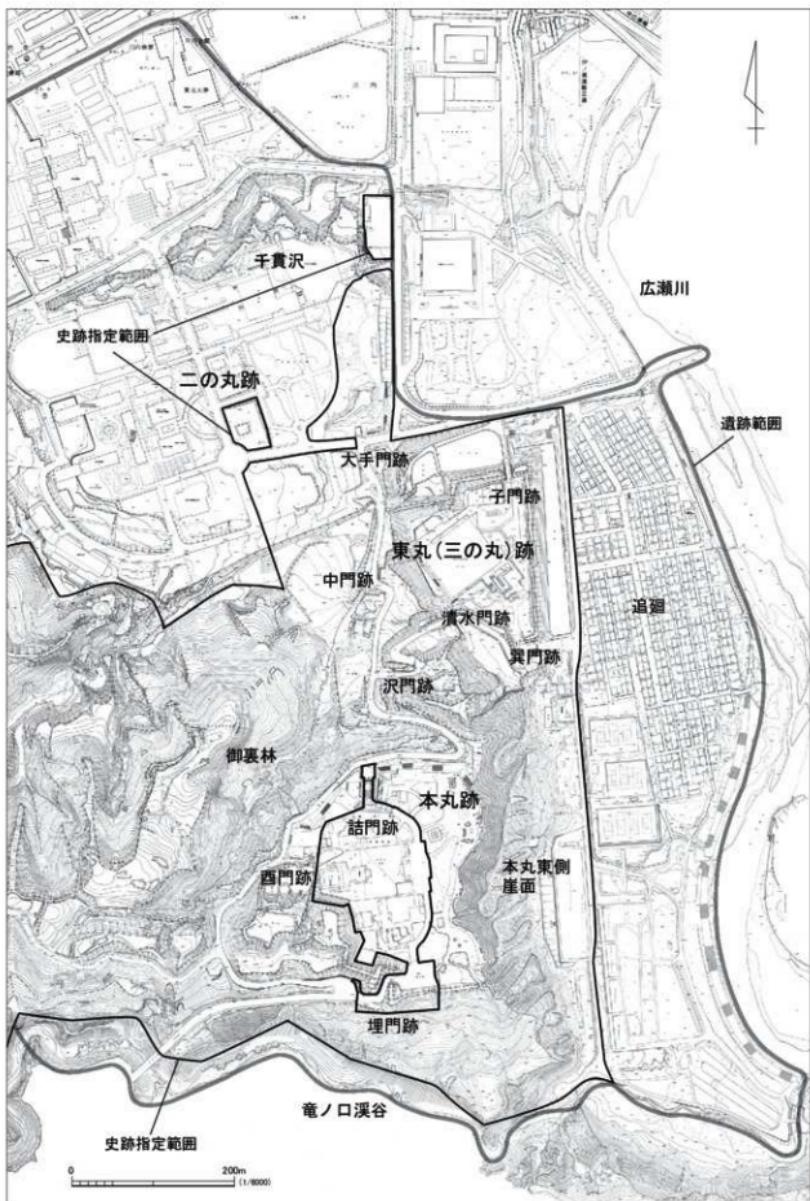
調査および整理参加者 相澤隆子、石倉蓮、追木愛美、太田裕子、桂島通子、菅家婦美子、
椎野達也、鹿野麗子、高橋克也、田中春美、沼崎雅弘、増田瑞枝、
松田進、山口修希、結城龍子





城跡跡		23	成覚寺板碑	47	愛宕山横穴墓群 A 地点
1	仙台城跡	24	陸奥国分寺五輪塔	48	愛宕山横穴墓群 B 地点
2	亘岡城跡	25	三宝荒神社板碑群	49	大年寺山横穴墓群
3	郷六街城跡	26	長間寺板碑	50	宗佛寺横穴墓群
4	国分懸瓶跡	27	須坂古墳・少林神社板碑群	51	兜塚古墳
5	茂ヶ崎城跡	28	古城神社板碑	52	杉土手 (跑除土手)
6	若林城跡	29	古業神社板碑	53	茂ヶ崎横穴墓群
7	北目城跡	30	宅地古碑群	54	二ツ沢横穴墓群
神社・寺院・墓所等		31	郡山三丁目古碑群	55	法領塚古墳
8	経ヶ峯伊達家墓所	32	八幡社古碑群	56	保春院前遺跡
9	亀岡八幡神社	33	長町駄異古碑群	57	糞穂畠遺跡
10	東照宮	34	西台煙板碑群	58	南小泉遺跡
11	政宗灰塚	35	蛤薬師古碑群	59	朝鮮ウメ
12	林子平墓	その他の主な遺跡		60	郡山遺跡
13	大崎八幡神社	36	川内 A 遺跡	61	西台塙遺跡
14	三沢初子の墓など	37	川内 B 遺跡	62	長町駄東遺跡
15	陸奥国分寺跡	38	川内 C 遺跡	63	一塚古墳
16	大年寺山伊達家墓所	39	川内武家屋敷遺跡	64	二塚古墳
17	大年寺懸門	40	桜ヶ丘公園遺跡	65	富沢遺跡
板碑・石碑		41	青葉山 B 遺跡	66	金岡八幡古墳
18	川内古碑群	42	青葉山 E 遺跡	67	砂押古墳
19	片平仙台大神宮の板碑	43	青葉山 C 遺跡	68	芦ノ口遺跡
20	瀬不動尊文永十年板碑	44	青葉山 A 遺跡	69	土手内横穴墓群
21	延元 2 年板碑	45	青葉山 D 遺跡	70	三神峯遺跡
22	郷六大日如来の碑	46	蛤薬師堂東遺跡	71	裏町古墳

第1図 仙台城跡の位置と周辺の遺跡



第2図 仙台城跡周辺地形図

II. 仙台城跡の概要

1. 仙台城跡の地理的環境

仙台城跡は、仙台市の中心市街地の西方にある、青葉山丘陵およびその麓の河岸段丘部分を中心に城域が形成されている近世城郭である。仙台城跡は、本丸・二の丸・東丸（三の丸）に分かれ、それぞれ異なる段丘面に造られている。

本丸は青葉山丘陵の高位段丘である青葉山段丘面（標高 115 ～ 138m）に位置する。正保 2 年（1645）の「奥州仙台城絵図」には「東西百三十五間、南北百四十間」とあり、一間を六尺として換算すると東西 245m、南北 267m となる。本丸は南側に落差約 40m の竜ノ口渓谷、東側には広瀬川に落ちる 60m 以上の断崖があり、天然の要害になっている。比較的傾斜の緩やかな本丸の北側には約 17m の高さを有する石垣が築かれている。尾根続きになっている本丸西側には 3 条の大規模な堀切が確認されている。その奥には藩政期には立ち入りが禁じられていた「御裏林」と呼ばれた森林が広がっており、今でも貴重な自然が現存していることから、昭和 47 年（1972）に国指定天然記念物「青葉山」に指定され、現在は東北大植物園となっている。

二の丸は、本丸の北西に位置する一段下がった仙台上町段丘（標高 54 ～ 71m）にある。広瀬川に向かって流れる二つの沢に挟まれ、御裏林を背に立地している。東側の大手門跡付近には高さ約 9m の石垣が残り、その南側には大手門脇櫓が昭和 42 年（1967）に再建されている。

東丸（三の丸）は、本丸の北東に位置し、二の丸よりさらに下がった仙台下町段丘上（標高 40m 程度）に立地している。外郭の北側と東側を水堀と土塁に囲まれ、南側からは本丸へと上の登城路として翼門から清水門、沢曲輪、沢門と続いている。東丸（三の丸）東側のさらには低位の段丘面には追廻地区があり、重臣の屋敷や馬場が広がっていた。その東を流れる広瀬川の岸部分には石垣が残存している。

2. 仙台城跡の歴史的環境

（1）仙台城築城以前の歴史的環境

仙台城築城以前の遺跡として、後期旧石器時代から古代にかけての遺跡がある。青葉山 A ～ E 遺跡がある。特に青葉山 E 遺跡では縄文時代の遺構・遺物がまとめて確認されている。また、仙台城跡二の丸に隣接する川内 A 遺跡や川内 B 遺跡からも縄文時代の遺物が出土している。仙台城跡が立地する青葉山にはかつて寺院があったとする伝承があり、愛宕山の大満寺虚空蔵堂は仙台城築城に伴って現在の地に移転したとされる。御裏林の中には、川内古碑群があり、中世期における仙台城跡周辺が宗教的な場であったことを物語っている。伊達政宗が仙台城として築城する以前は、国分氏の居城であったとされ、史料からは「千代城」と呼ばれていた。16 世纪代には、国分氏は伊達氏に吸収され、「千代城」は天正年間（1573 ～ 1592）以降には廢城となったとされている。平成 10 年（1998）の本丸北壁石垣修復工事に伴う調査では、政宗の築いた仙台城とは異なる時代の虎口・堅堀・平場・通路などの遺構が検出されていることから、仙台城跡にはその前身となる中世山城が存在していたことが想定される。

（2）仙台城の歴史的環境

仙台城は仙台藩初代藩主伊達政宗によって築かれ幕末まで藩政の中心として維持された城である。慶長 5 年（1600）12 月 24 日に城の縄張りが開始され、慶長 7 年（1602）5 月には一応の完成をみたとされる。築城当初の仙台城は未解明の部分が多いが、千代城の縄張りを改変したもので、それまで千代と呼ばれていたこの地を政宗が築城の際に仙台と改めたとされている。絵図や文献によれば本丸には、慶長 15 年（1610）に完成した大広間を中心とする御殿建物群が存在していた。東側の城下を見下ろす崖に造られた懸造、能舞台や書院など、上方から招いた当代一流の大工棟梁・工匠・画工等によって作られた桃山文化の集大成と言える建物群が威容を誇っていたと考えられる。

築城期の本丸は現在見られる本丸の縄張りと異なっていることが明らかになっており、現在の本丸の縄張りとなるのは寛文 8 年（1668）の地震により被災した石垣の修復後と考えられる。また、西脇櫓・東脇櫓・良櫓・巽櫓などの三重の櫓は、正保 3 年（1646）4 月の地震によって倒壊したとする記事がみられ、以後再建されなかつた。後に二の丸となる山麓部には、政宗の四男である伊達宗泰や長女である五郎八姫の屋敷があつたと考えられ、それを裏付けるよ

うな遺構や遺物が発見されている。寛永13年(1636)政宗の死後、二代藩主忠宗は宗秦の屋敷があったとされている場所に二の丸の造営を開始した。それ以降はこの二の丸が藩政の中心となり、東丸(三の丸)・重臣武家屋敷などが一体となって城域を形成していた。また、二の丸は貞享4年(1687)から元禄13年(1700)にかけて四代藩主綱村によって大きな改造が行われ、仙台城の基本的な構成が完成することとなる。

東丸(三の丸)には、築城当初は政宗の私邸の屋敷があったと考えられる。東丸(三の丸)周囲には水堀と土塁がめぐり、現在も残存している。二の丸が造営された寛永年間には米蔵が置かれたと考えられる。また、東丸(三の丸)南側の巽門と清水門に隣接する平場からは、井戸跡も確認されている。

(3) 仙台城廬城後の歴史的環境

仙台城は、明治2年(1869)の版籍奉還を受けて二の丸に明治政府の勤政庁が置かれ、明治4年(1871)には東北鎮台(後に仙台鎮台)が置かれることとなった。それらの庁舎には二の丸の殿舎が利用されていたが、明治15年(1882)の大火によって全て焼失した。本丸も東北鎮台の管理下に置かれ、建物群は明治の初め頃に取り壊されたようであるが、正確な年月は不明である。

明治21年(1888)に仙台鎮台は陸軍第二師団となり、二の丸には師団司令部が置かれる。一方で本丸には、明治35年(1902)に昭忠碑、明治37年(1904)に仙台招魂社が建立された。招魂社は昭和14年(1939)に宮城縣護國神社となつた。

仙台城の面影を残していた中門は大正9年(1920)に取り壊され、国宝の大手門および脇櫓・巽門は、昭和20年(1945)の仙台空襲によって焼失した。現在では大手門北側の土壠が江戸時代からの姿を残しているのみである。戦後、仙台城跡は米軍の駐屯地となり、中島池などが埋め立てられるなど造成が行われた。昭和32年(1957)に米軍から土地が返還されると二の丸の大半は東北大大学が使用することとなった。東丸(三の丸)には昭和36年(1961)に仙台市博物館が建設された。昭和42年(1967)には大手門脇櫓が再建されている。本丸は神社敷地となっているほかは青葉山公園として利用されている。

3. 仙台城跡の発掘調査

仙台城跡の調査は、昭和58年(1983)に実施された東北大大学構内の施設整備に伴う二の丸跡の発掘調査と、仙台市博物館の改築工事に伴って昭和58・59年(1983・1984)に実施された東丸(三の丸)跡の発掘調査から始まる。

本丸北壁の石垣は昭和30年代から変形が目立ち始め、防災上の観点により平成9年(1997)から石垣修復工事が行われた。石垣の解体に伴って行われた本丸跡の発掘調査により、現存石垣(Ⅲ期石垣)背面より2時期にわたる旧石垣(Ⅰ期・Ⅱ期石垣)が検出され、石垣の変遷が明らかになった。

平成13年(2001)からは国の補助を受け、発掘調査の他に遺構現況調査や石垣測量などの総合調査を実施している。平成17年(2005)からは、東丸(三の丸)土塁における石垣や土壠等の遺構確認のための調査を実施しており、土塁の構成などが明らかになりつつある。また、巽門の上の平場にある造酒屋敷跡を対象とした調査では、仙台藩の御用酒屋であった樋森家の屋敷跡や酒造りに使われたと考えられるカマド跡も検出された。このように、令和2年(2020)3月現在で34次にわたる調査を実施している。

平成15年(2003)5月に三陸沖を震源とする地震により、中門跡と清水門跡の石垣の一部が被災し、平成15~17年(2003~05)に災害復旧工事を行った。平成23年(2011)3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)では本丸跡と周辺崖地、大手門脇櫓、西門、中門、清水門の石垣などが被災し、平成23~28年に災害復旧工事を行った。

第1表 仙台城の沿革

時期	年号	西暦	主な出来事
二の丸造営以前	天文 6 年	1537	千代城として国分氏の居城が存在、仙台城の前身
	慶長 5 年	1600	政宗、千代を仙台と改め、城普請の調査を行う
	慶長 6 年	1601	政宗、仙台城普請を開始し、自らも仙台に移る (築城開始) (第Ⅰ期石垣)
	慶長 8 年	1603	政宗、仙台城に入城する
	慶長 13 年	1608	城内に御用酒屋が造られる
	慶長 15 年	1610	仙台城大広間・懸造・書院・能舞台が完成する
	元和 2 年	1616	地震により本丸石垣・櫓(櫓などか)が被害を受ける 政宗による修復が始まる (第Ⅱ期石垣)
	元和 6 年	1620	松平忠輝の改易により、五郎八姫が江戸屋敷に帰され、宗泰屋敷の北側に西屋敷の造営が始まる
	寛永 13 年	1636	政宗、江戸桜田邸で死去。忠宗二代藩主となる
	慶長 5 年～寛永 15 年	1600 ~ 1638	現東丸(三の丸)は政宗の下屋敷であったと考えられる
二の丸造営後	寛永 15 年	1638	二代藩主忠宗により、二の丸の普請が開始される (1639 年 6 月完成)
	正保 2 年	1645	現東丸(三の丸)は『奥州仙台城繪図』に「藏屋敷」と記載される
	正保 3 年	1646	地震により本丸石垣が崩れ、櫓が倒壊する
	寛文 4 年	1664	現東丸(三の丸)は『仙台御城下繪図』に「御米蔵」と記載される
	寛文 8 年	1668	地震により、仙台城本丸石垣が崩れる 四代藩主綱村による修復が始まる (第Ⅲ期石垣)
	寛文 9 年	1669	現東丸(三の丸)は『仙台城下繪図』に「御米蔵」と記載される
	寛文 11 年	1671	寛文事件(伊達騒動)起こる
	天和 2 年	1682	現東丸(三の丸)は『奥州仙台城並城下繪図』に「東丸」と記載される
	元禄 4 年	1691	現東丸(三の丸)は 1686 ~ 1694 年頃の『御修覆帳』に「三之御丸御米蔵」と記載される。 「三の丸」の名称の初現
	元禄 6 年間	17 世紀末	二の丸が大改修され、中奥が拡張される
	宝永 7 年	1710	現東丸(三の丸)は 1711 ~ 1749 年頃の『御修覆帳』に「三丸御米蔵」と記載される
	享保 15 年	1730	現東丸(三の丸)は『徳奥国仙台城普請窓』に「東丸」と記載される
	文化元年	1804	雷火のため二の丸全焼し、再建される
	文化 2 年	1805	九代藩主周宗、二の丸再建に着手 (1809 年 4 月完成)
近代以降	明治元年	1868	仙台藩降伏
	明治 2 年	1870	版籍奉還に伴い、二の丸に勤政庁を設置
	明治 4 年	1871	東北鎮台(後の仙台鎮台)を仙台城二の丸に移し、明治 7 年頃までに仙台城本丸が破却される
	明治 15 年	1882	仙台鎮台(後の第二師団)の失火により二の丸建物は焼失し、その跡地に陸軍第二司令部が建てられる
	昭和 6 年	1931	大手門・脇櫓を国宝指定
	昭和 20 年	1945	仙台空襲によって、大手門・脇櫓、巽門焼失
	昭和 40 年	1965	大手門脇櫓建設着工 (1967 年 12 月完成)
	平成 9 年	1997	石垣修復工事に伴う仙台城本丸跡の発掘調査を開始する
	平成 13 年	2001	本丸大広間などの発掘調査を開始する
	平成 15 年	2003	仙台城跡史跡指定
	平成 16 年	2004	仙台城本丸跡石垣修復工事完成
	平成 23 年	2011	東日本大震災により石垣・土塀、崖地などが被害を受ける
	平成 28 年	2016	地震被害からの災害復旧工事が完了する

III. 仙台城跡の発掘調査の実績と計画

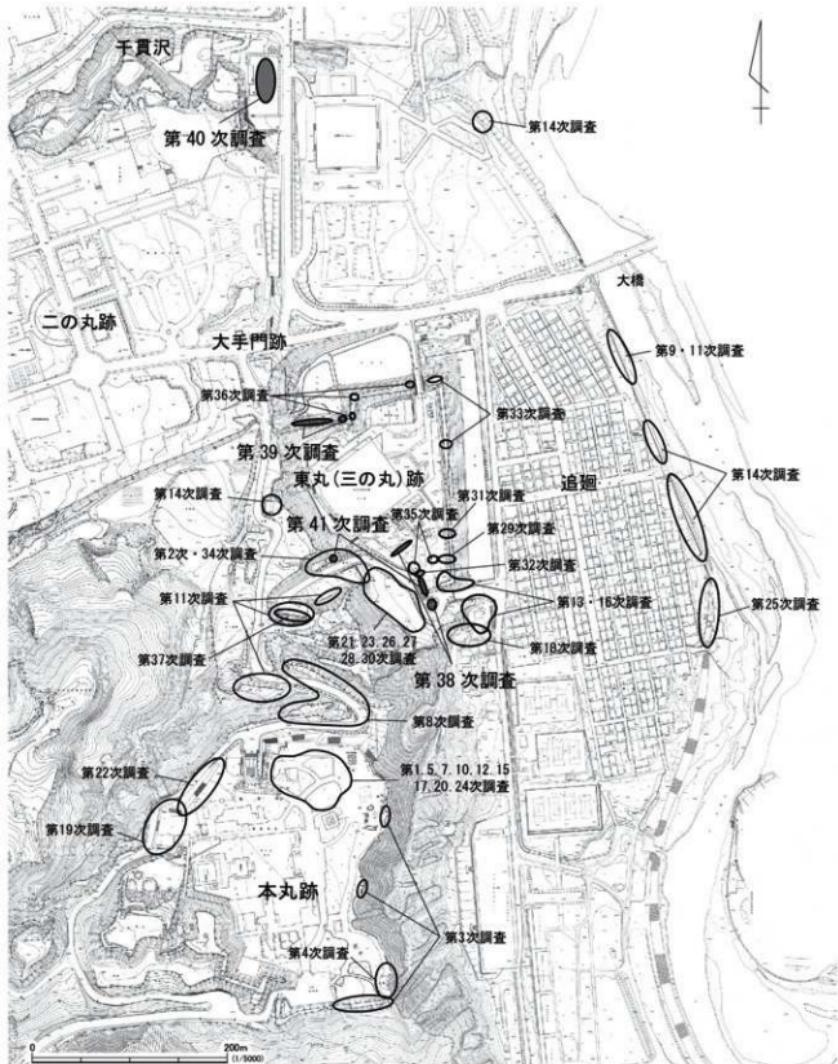
令和3年度は、仙台城跡整備に向けて登城路跡（第5次）、東丸（三の丸）土塁（第7次）、扇坂下（第1次）の遺構確認調査と清水門井戸石垣（第2次）・翼門西側石垣測量を実施した。

第2表 これまでの調査実績

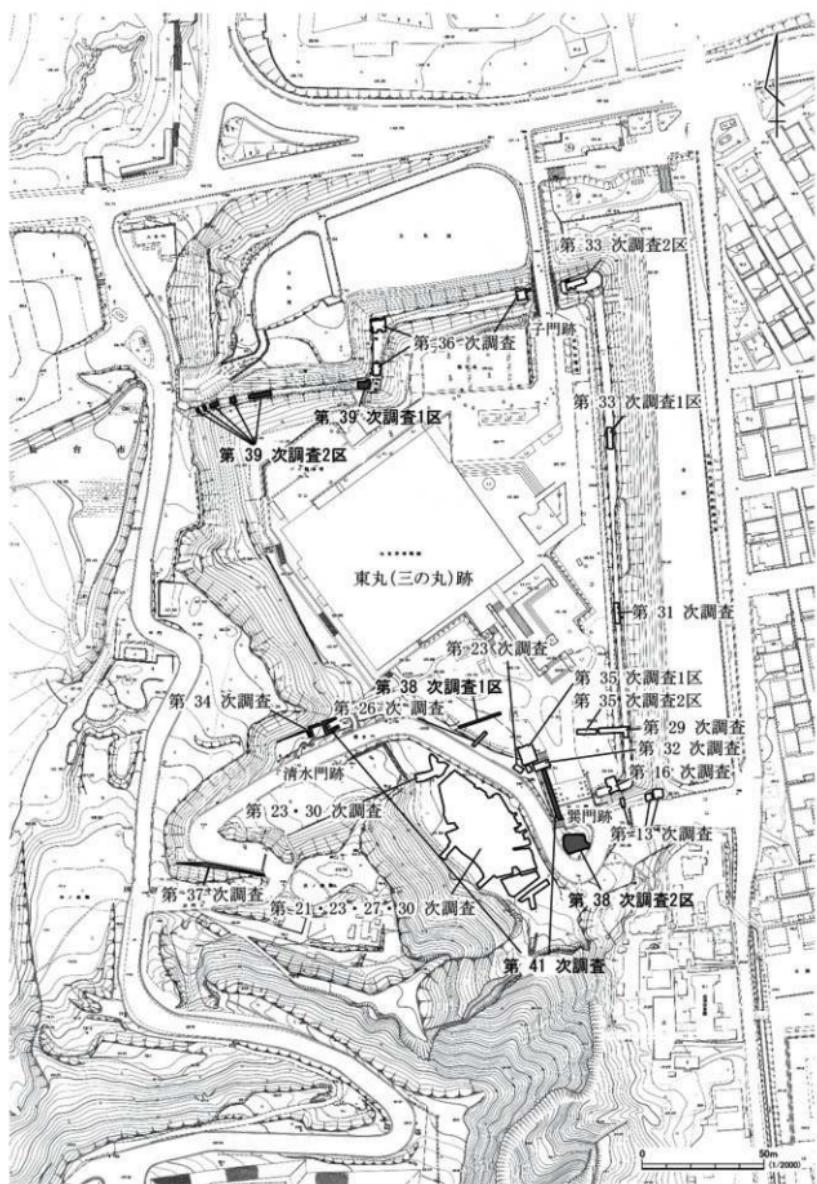
調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第1次	大広間跡(1次)	185m ²	平成13年 9月17日～12月27日
第2次	清水門跡付近石垣測量	210m ² (立面)	平成13年11月30日～平成14年 2月13日
第3次	大番土手土塁・御守殿跡・懸造跡	1,400m ²	平成14年 5月20日～平成15年 1月31日
第4次	翼櫓跡	110m ²	平成14年 5月20日～ 8月31日
第5次	大広間跡(2次)	470m ²	平成14年 8月 5日～12月20日
第6次	仙台城跡(全城)	約145ha	平成15年 5月 7日～ 8月 8日
第7次	大広間跡(3次)	258m ²	平成15年 8月 4日～12月25日
第8次	登城路跡(1次)	58m ²	平成15年11月12日～12月25日
第9次	広瀬川護岸石垣測量(1次)	50m ² (立面)	平成15年12月 9日～平成16年 2月 5日
第10次	大広間跡(4次)	397m ²	平成16年 7月20日～12月24日
第11次	登城路跡(2次)・広瀬川護岸石垣測量(2次)	349m ² (立面)	平成16年12月18日～平成17年 3月31日
第12次	大広間跡(5次)	446m ²	平成17年 5月26日～10月19日
第13次	東丸(三の丸)堀跡(1次)・東丸(三の丸)土塁(1次)	86m ²	平成17年11月 1日～12月22日
第14次	中門北側・広瀬川護岸石垣測量(3次)	627m ²	平成18年 1月16日～ 1月20日
第15次	大広間跡(6次)	311m ²	平成18年 6月 1日～ 8月 4日
第16次	東丸(三の丸)堀跡(2次)・東丸(三の丸)土塁(2次)	522m ²	平成18年 9月 1日～11月30日
第17次	大広間跡(7次)	263m ²	平成19年 5月28日～ 8月 3日
第18次	東丸(三の丸)堀跡(3次)	468m ²	平成19年 9月 1日～11月26日
第19次	本丸北西壁石垣測量(1次)	425m ² (立面)	平成20年 1月16日～ 1月18日
第20次	大広間跡(8次)	248m ²	平成20年 5月 8日～ 7月31日
第21次	造酒屋敷跡(1次)	160m ²	平成20年 8月26日～10月29日
第22次	本丸北西壁石垣測量(2次)	448m ² (立面)	平成20年12月24日～平成21年 1月21日
第23次	造酒屋敷跡(2次)	369m ²	平成21年 7月 1日～11月12日
第24次	大広間跡(9次)	2,25m ²	平成21年12月14日～12月15日
第25次	広瀬川護岸石垣測量(4次)	250m ² (立面)	平成21年12月16日～平成22年 1月 7日
第26次	造酒屋敷跡(3次)	369m ²	平成22年 6月 1日～10月31日
第27次	造酒屋敷跡(4次)	173m ²	平成28年 6月15日～10月31日
第28次	造酒屋敷跡(5次)	110m ²	平成29年 7月 5日～11月15日
第29次	東丸(三の丸)土塁(3次)	25m ²	平成29年 9月 4日～11月15日
第30次	造酒屋敷跡(6次)	357m ²	平成30年 6月25日～11月29日
第31次	東丸(三の丸)土塁(4次)	17m ²	平成30年10月 1日～11月29日
第32次	登城路跡(3次)	19m ²	令和元年 7月 1日～11月 7日
第33次	東丸(三の丸)土塁(5次)	37m ²	令和元年 7月 1日～11月 7日
第34次	清水門北側石垣測量(2次)	34m ²	令和元年 7月 2日～12月20日
第35次	登城路跡(4次)	113m ²	令和2年 5月11日～10月 9日
第36次	東丸(三の丸)土塁(6次)	60m ²	令和2年 5月11日～10月 9日
第37次	沢門下石垣測量(2次)	124m ²	令和2年 7月 2日～12月18日

第3表 調査計画表と調査実績表

調査次数	調査予定地区	予定面積	調査面積	調査予定期間	調査期間
第38次	登城路跡(5次)	163m ²	69m ²	令和3年 5月10日～ 9月10日	令和3年 8月 1日～11月 5日
第39次	東丸(三の丸)土塁(7次)	60m ²	29m ²	令和3年 5月10日～ 9月10日	令和3年 9月11日～11月12日
第40次	扇坂下(1次)	120m ²	60m ²	令和3年 5月10日～ 9月10日	令和3年11月 8日～11月19日
第41次	清水門井戸石垣(2次)・翼門西側石垣測量	58m ²	58m ²	令和3年 3月10日～ 9月13日	令和3年 7月16日～12月17日



第3図 仙台城跡遺構確認調査・調査区位置図 (1/5000)



第4図 東丸（三の丸）周辺 第38・39・41次調査区位置と周辺調査（1/2000）

IV 第38次調査（登城路跡第5次）

1. 調査の概要

(1) 調査目的

仙台城跡第38次調査（登城路跡第5次調査）は、巽門跡から沢門跡にいたる登城路整備（『史跡仙台城跡整備基本計画』令和2年度策定）に向けた確認調査である。今回の調査では、2箇所の調査区を設定した。1区は、登城路跡第4次調査（令和2年度）1区で確認された路面の広がりを確認することを目的とし、東丸（三の丸）内の蔵屋敷跡と登城路跡の境界付近に設定した。2区は、巽門西側石垣の延長部分を確認することを目的に実施した。

巽門西側石垣は、追廻側から登った先、巽門前の構形の西壁にあたり、造酒屋敷跡の曲輪下に築かれた石垣である。^{史料} 絵図・史料からは、近世に1度だけ修理を確認することができる。元禄7年（1694）11月29日付の老中奉書で「東丸巽門右脇石垣（略）崩廻付築直之事」とあり、『仙台城修復窓絵図』（第5図2）に位置が示され、巽門より南側の天端付近を修理している。現在、巽門跡より南側延長部の石垣は、近代以降の道路建設（第5図3・4）による切土で盛土されているため石垣は見えない状況である。

(2) 調査方法

1区は巽門跡の北西側約40m離れた箇所に、2区は巽門跡の南側約10m離れた箇所に設定した。調査を開始するにあたり、災害復旧事業で清水門石垣の測量のために設置された基準点を使用した。これらの基準点を基に、それぞれの調査区に2箇所、任意の基準点を設置し、世界測地系座標と標準高値を求めた。測量などはそれら基準点を使用した。

調査区設定後には、表土および近現代の堆積土を1区は人力で除去し、2区は重機で除去した。その後は、人力により遺構検出を行った。2区の一部で下層遺構の確認を行っている。遺構の平面図は、調査区周辺に設置した基準点を基に、縮尺20分の1で作図した。土層断面図については、任意の基準点を設定して作図し、設定した基準点の座標値を計測し、平面図に合成した。今回の調査では、写真撮影にデジタルミラーレス一眼を用い、一部の遺構・断面については、35mmカメラでカラーとモノクロのフィルムを用いて撮影した。2区のKS-1193石垣のオルソフォトは、SPMソフトウェアのAgisoft社Metashape Standard版（64bit）を用いて作成した。調査区の埋め戻しは、遺構を保護するため全面に不織布を敷き、調査区全体を厚さ5cm程度の山砂で覆い、その後、掘削土を転圧しながら旧状に戻した。

(3) 調査経過

現地調査は、7月1日までに機材の準備および1・2区の調査区の設定を行い、7月5日にフェンス等を設置した。2区は、8月2日に重機で掘削を開始し、近代の表土および整地土を除去した。8月6日にKS-1193石垣を検出した。9月10日には、調査区中央部（石垣前面）にサブトレレンチを設定し、根石およびKS-1197土坑、KS-1195集石を確認した。10月26日に調査区全景の写真撮影を行い、遺構の記録を実施した。11月2日より山砂を入れて遺構を養生した後に埋め戻しを開始した。また、掘削で出土した石垣の築石の可能性のある石材3石を重機で吊り上げ、個別に写真で記録した後、調査区内に埋め戻した。

1区は、付近の樹木や根により掘削できる範囲が限られることから、9月9日に調査区を再設定し、当初の面積よりも縮小して調査を開始した。9月27日にはKS-1196コンクリート排水溝を確認した。さらに調査区内で現代の暗渠、埋設された地中電線を複数確認し、これ以上の調査区の拡張を行わなかった。10月25日には調査区全景の写真撮影を行い、遺構の記録を実施した。11月2日より山砂を入れて遺構を養生した後に埋め戻しを開始した。

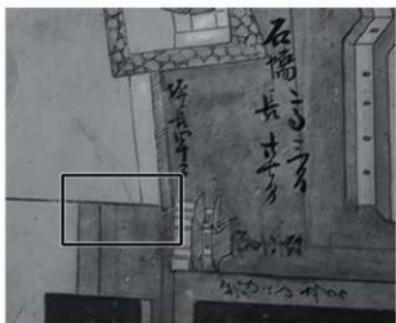
1区・2区ともに11月5日には埋め戻しを完了し、同日フェンス等を撤去して現地調査を終了した。

(4) 善及活動

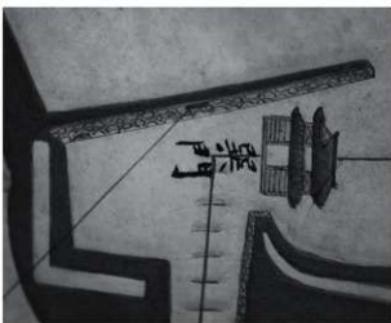
普及活動として、遺跡見学会を予定していたが、令和2年3月より全国的に広まった新型コロナウイルスの感染拡大防止のため中止とした。調査成果については、宮城県考古学会主催の遺跡調査成果発表会で資料報告した。

2. 基本層序

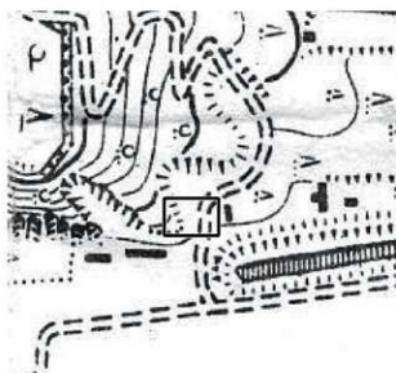
1区と2区において堆積状況が大きく異なるため、それぞれの調査区で基本層名を付した。以下、調査区毎にその



1. 「奥州仙台城絵図」正保2年(1645) 仙台市博物館蔵

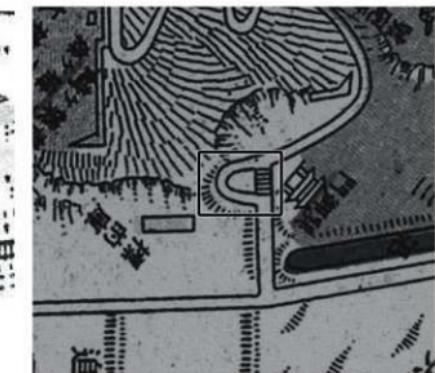


2. 「仙台城修復窺絵図」元禄7年(1694) 仙台市博物館蔵



3. 明治38年(1905)頃 地形図

『地図で見る仙台の変遷』日本地図センター



4. 「仙台市全図」大正元年(1912)

『絵図・地図で見る仙台 第一輯【第二版】』今野印刷株式会社

第5図 翼門西側石垣の変遷

特徴を記述する。

(1) 1区

1区では大別4層、細別11層の基本層を確認した。I層は現代の表土、II層は近現代の整地土、III層は近世の整地土、IV層は自然堆積土（地山）である。

I層（表土）

4層に細分した層で、現表土である。

II層（近現代の整地土）

3層に細分し、KS-1196コンクリート排水溝を覆う整地土であるため、昭和32年（1957）以降の整地土と考えられる。II a上面は、砂利敷となっている。

III層（近世の整地土）

近世の瓦片が出土し、近・現代の遺物が含まれないことから、近世の整地土と考えられる。

IV層（自然堆積土）

3層に細分した。にぶい黄橙色砂質土が主体で段丘堆積物の一部と想定し、また遺物の混入が認められないことから、自然堆積土と判断した。IV層上面は、凹凸が激しく近現代における改変によるものと考えられる。

(2) 2区

2区では大別9層、細別29層の基本層を確認した。I～IV層は近・現代の堆積土、V～VII層は近世の整地土、IX層は自然堆積土である。

I層（現表土）

2層に細分した層で、現表土である。

II層（近現代盛土）

4層に細分した。炭化物や亜炭片を多く含み、特にIIa層は亜炭を多量に含んでいる。そのため青葉山で亜炭採掘を行っていた明治期から昭和30年代の盛土の可能性がある。

III層（石垣改変後の近代盛土②）

8層に細分した。KS-1193石垣に使用されていたと思われる石材と裏込めに使用されたと考えられる円礫を含み、ガラス片と亜炭、花崗岩片が伴うことから、近代に石垣を改変した直後の盛土と考えられる。石垣背面の西から東に傾斜して斜面部を形成しており、石垣前面は、近世整地層VI d層上面まで厚く堆積がみられる。石垣前面のIII層中からは、築石に使用されていたと考えられる石材3石が出土している。調査区の広範囲で堆積がみられ、石垣背面から石垣前面側にかけて削平範囲も広大であることから、明治44年(1911)以降の追廻から本丸までの道路工事に伴う盛土と考えられる。

IV層（石垣崩落後の近代盛土①）

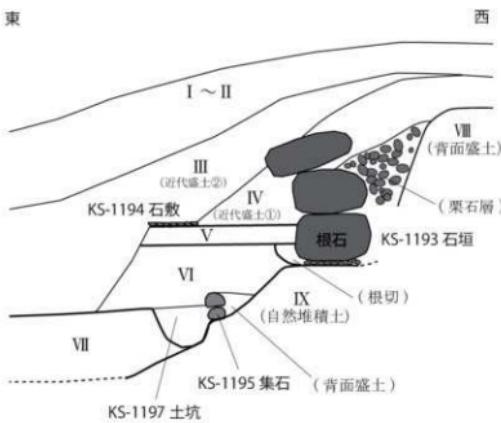
6層に細分した。III層同様に石垣に使用されていたと思われる石材と裏込めに使用されたと考えられる円礫を含み、ガラス片と花崗岩片が伴うことから、近代に石垣が崩落した直後の盛土と考えられる。主に調査区北側で堆積がみられ、西から東に傾斜して斜面部を形成している。IV e・f層はKS-1193石垣北部が崩落した時の盛土と考えられ、原位置に近い状態で倒れしている築石5石が乗っている。IV層は、III層以前の近代の工事が考えられ、明治期前半の巽門を迂回する登坂道(現在の階段)設置に伴う造成土の可能性がある。

V層（近世の整地土）

2層に細分した。KS-1193石垣構築後の石垣前面を覆う整地土である。V a層中から、19世紀前半から中頃の大堀相馬産土瓶(図版5-26)が出土しているため、19世紀以降の整地土である。

VI層（近世の整地土）

4層に細分した。KS-1193石垣の根石前面の整地土であり、石垣の構築面である。19世紀代の堤産陶器ミニチュア蓋(第18図14)が出土している。



第6図 2区断面模式図

VII層（近世の整地土）

KS-1193 石垣構築以前の整地土である。KS-1197 土坑の構築面である。

VI層（近世の整地土）

2層に細分した。KS-1193 石垣の背面盛土である。

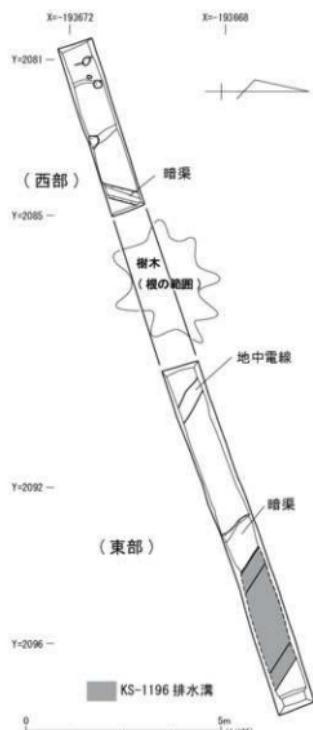
IX層（自然堆積土）

明オリーブ灰色シルトが主体で岩盤が風化した段丘堆積物の一部と考えられ、自然堆積土と判断した。遺物は出土していない。また、IX層上面は、東側にかけて約30度の傾斜面となる。上面では、KS-1195 集石を検出している。

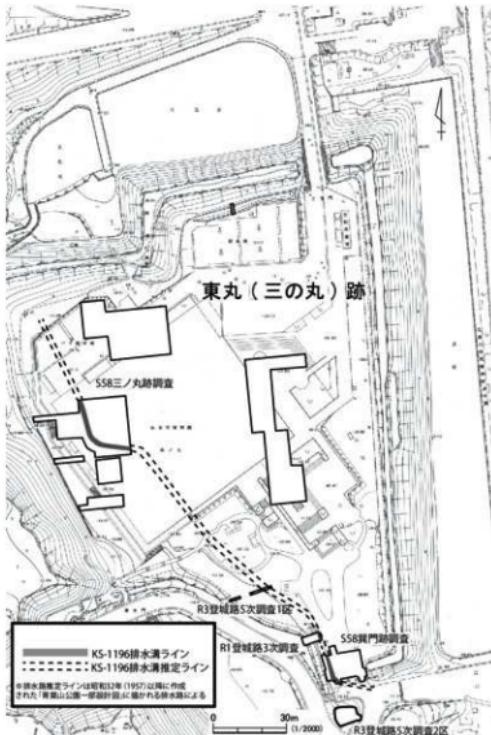
3. 1区検出遺構

(1) KS-1196 コンクリート排水溝

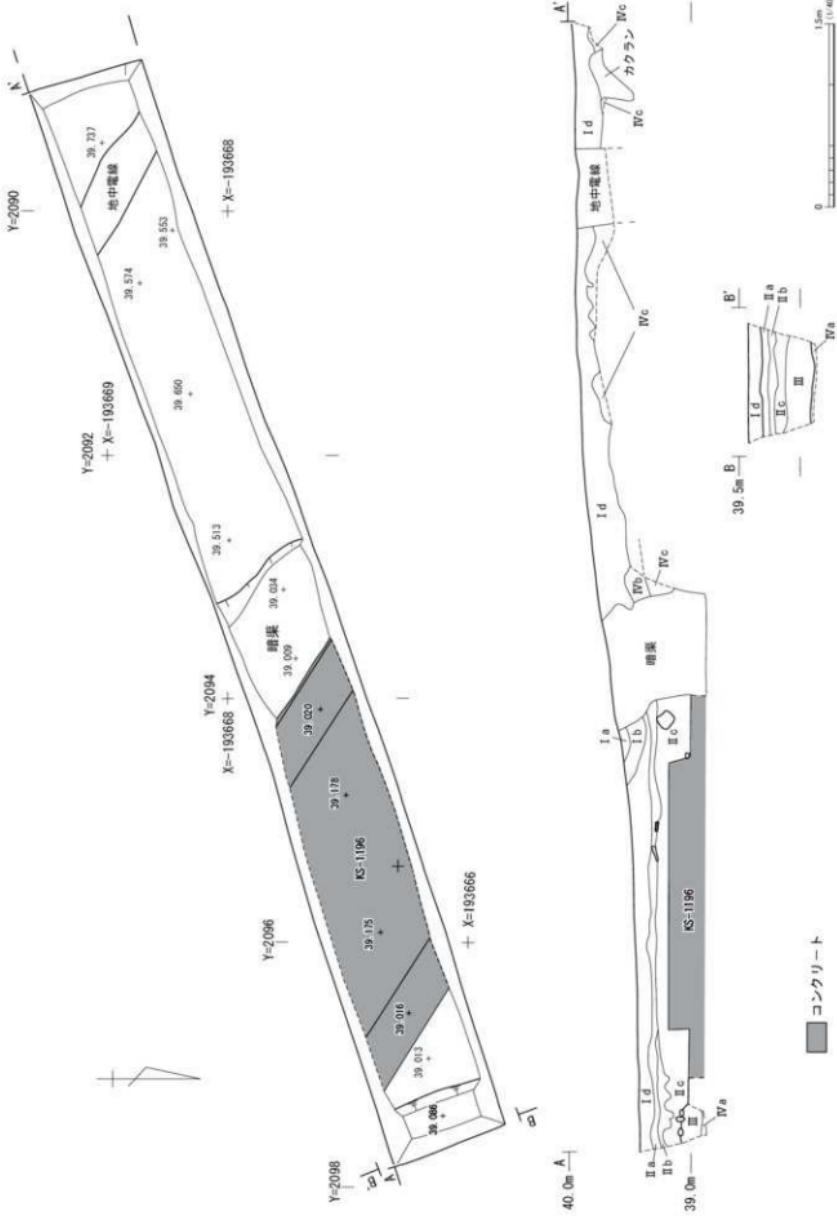
北東部で確認した。規模は最大幅が2.9mで平らな凸型の形状である。南東から北西方向に延びる。排水溝内部では水は流れていおらず現在は機能していない。同形態のコンクリート排水溝は、第32次調査（令和元年度）、昭和58年（1983）の東丸（三の丸）跡調査および巽門跡調査でも検出されている。周辺の調査で確認されているコンクリート排水溝は、昭和32年（1957）以降に作成された「青葉山公園一部設計図」で確認できる排水溝と場所が一致するため一連のものと考えられる。



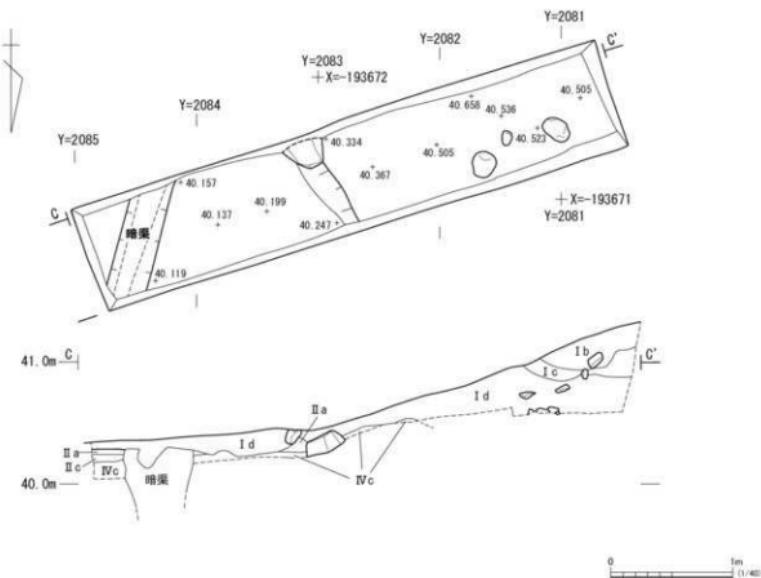
第7図 1区全体平面図



第8図 KS-1196 排水溝全体図



第9図 1区平面図・断面図(1)



第10図 1区平面図・断面図(2)

第4表 1区土層注記表

遺構・層位		土色		土質	土性 しまり	備考
		土色No.	土色			
表土	I a	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	なし	現表土
	I b	2.5Y6/3	にぶい黄色	粘土	あり	凝灰岩片を含む
	I c	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	あり	径0.5~2cmの縲を少量含む 凝灰岩片を含む
	I d	10YR3/2	黒褐色	シルト	なし	
近現代の整地土	II	10YR5/6	黄橙色	シルト	あり	径2cm程度の凝灰岩片を微量に含む にぶい黄褐色粘土(10YR6/3)を微量に含む 炭化物粒を少量含む 瓦片・レンガ片を含む
	II b	10YR3/3	暗褐色	シルト	ややあり	径1~6cmの縲を多量に含む 炭化物粒を微量に含む レンガ片を少量含む
	II c	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	あり	炭化物粒を微量に含む レンガ片を微量に含む
近世の整地土	III	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	あり	径2~6cmの縲を少量含む 黒褐色粘土(10YR3/1) 明黄褐色粘土(10YR6/6)をブロック状に微量に含む 瓦片を含む
自然堆積土	IV a	10YR6/4	にぶい黄橙色	砂質土	なし	酸化鉄粒を微量に含む
	IV b	10YR6/3	にぶい黄橙色	粘土質シルト	あり	凝灰岩片を少量含む 酸化鉄粒を微量に含む
	IV c	10YR6/2	灰黄褐色	粘土	あり	径1.5~6cmの縲を少量含む 凝灰岩片を少量含む 酸化鉄粒を微量に含む

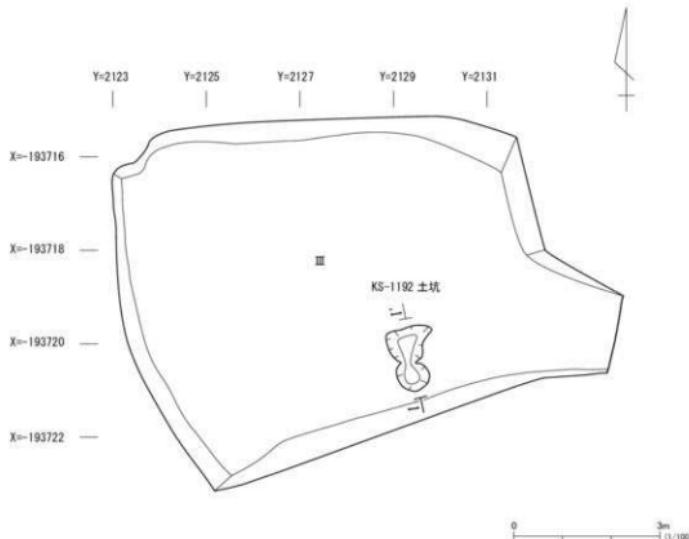
4. 2区検出遺構

(1) KS-1192 土坑

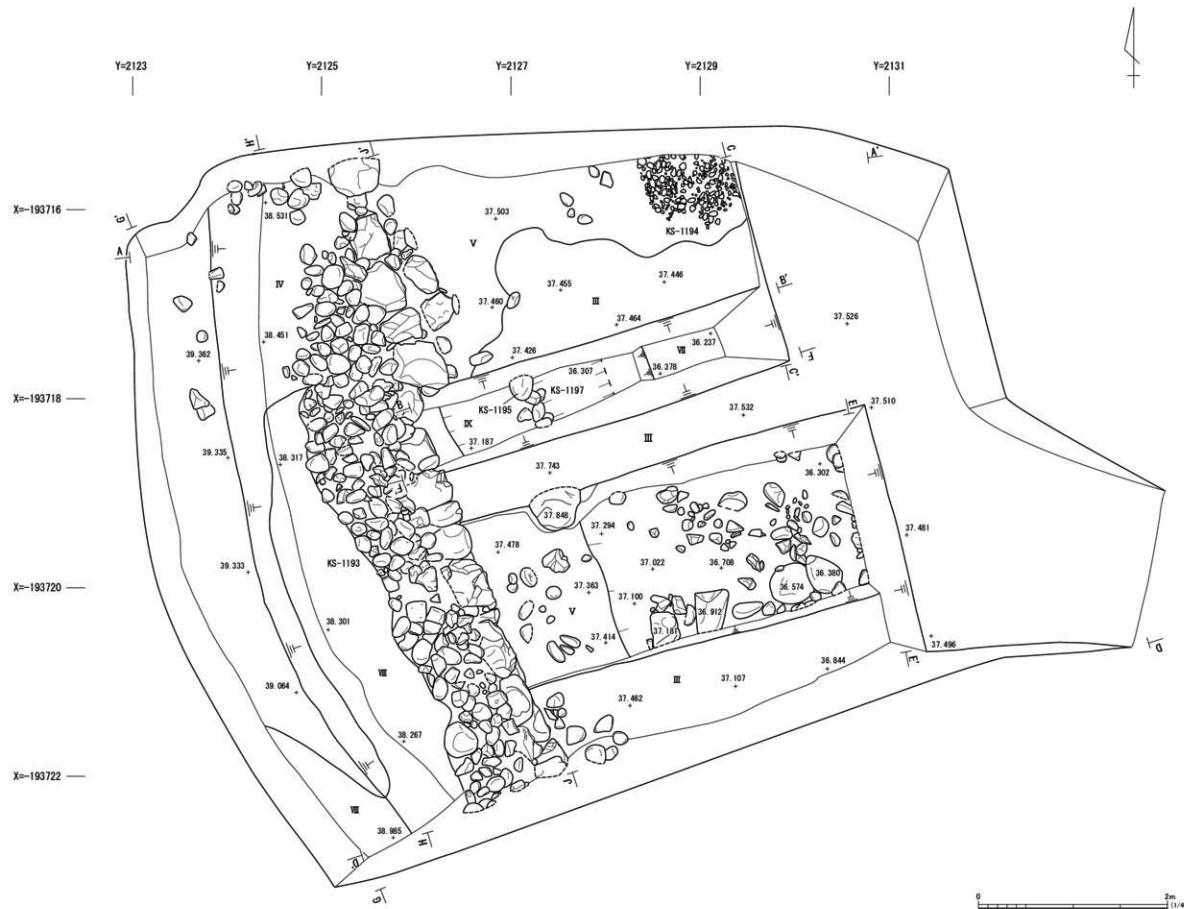
調査区南東部のIII a層上面で確認した。掘り込み面は、遺構上部を重機掘削時に掘削しているため不明であり、II層中から掘り込んでいる可能性がある。規模は東西90cm、南北1.4m、深さ29cmで、形状は瓢箪形に近い不整形である。堆積土は焼土と瓦を多量に含む。遺物は、ガラス片と近世の瓦、角釘が出土している。遺構の時期は、KS-1193石垣廃絶後の近代のIII層が堆積した後である。

(2) KS-1193 石垣

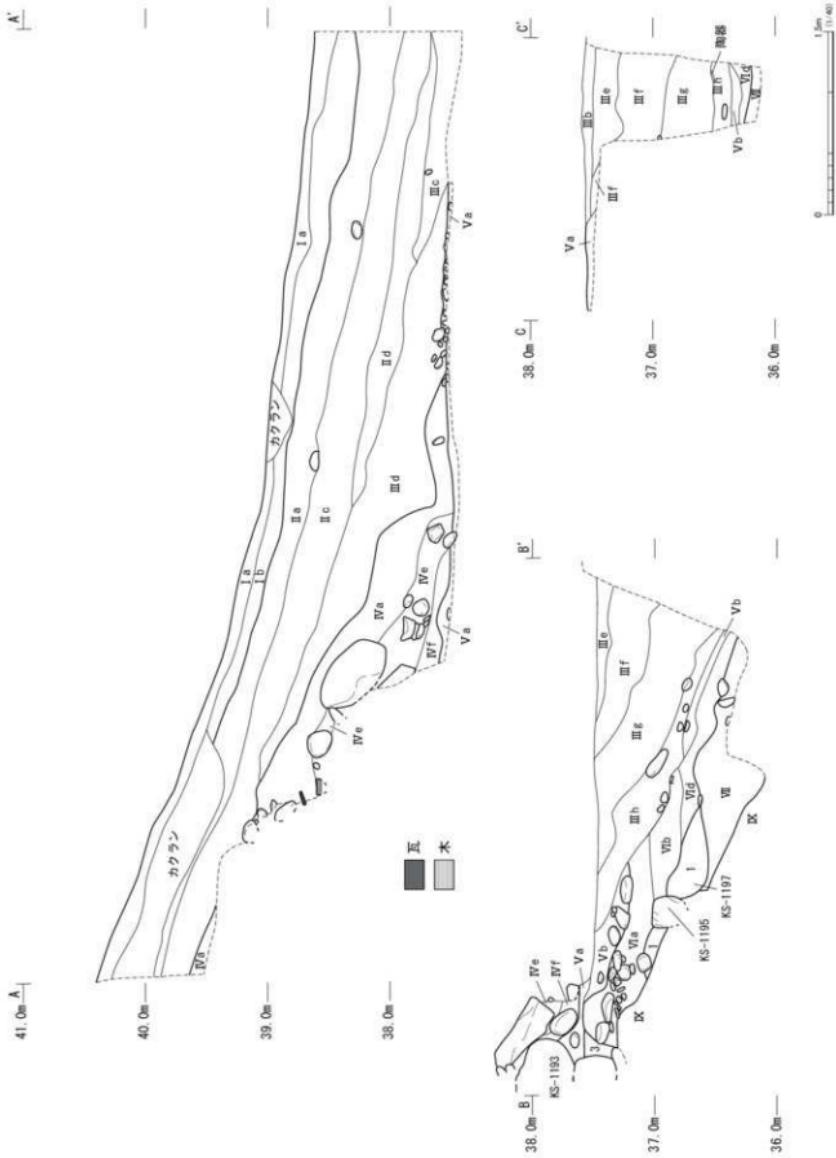
調査区西側で検出した。調査区南端から北端まで続き、さらに調査区外に延びる。軸線の方向はN19°Wであり現存する異門西側石垣の方向と一致する。積まれた状態では根石を含み2段分を確認し、北側の前倒した築石を含めると最大で4段以上あったことが考えられる。石垣の構築面はVI a層上面で、規模は全長6.9m、高さ0.7m(V層上面から)である。使用石材は、幅25~70cmで加工の無い自然石が用いられる。前倒している3段目築石(第16図No.19~23)については、石材の前面を調整した痕跡が確認できる。1~2段目の築石は、横長に配置され、横目地の通りを意識して積み上げられている。築石と築石の間には小振りな石材(第16図No.25・26)が間詰めされる。根石は、調査区中央部のサブトレーナーで2石(図16 No.16・17)確認した。石垣の背面は、背面盛土V層を確認している。裏込め層は、築石から0.6~1m幅で栗石が充填されている。栗石は、10~20cmの円錐が主体である。裏込め層からは、16世紀後半~17世紀初頭の美濃産天目茶碗(第18図26)が出土し、その他の遺物の混入は確認していない。石垣前面の整地土は、石垣構築後の整地面V層と石垣構築面VI層を確認し、下層で石垣構築以前のIX層を確認している。遺構の時期は、VI a層中で出土した堤産陶器ミニチュア蓋(第18図14)の年代から、19世紀以降と推測される。



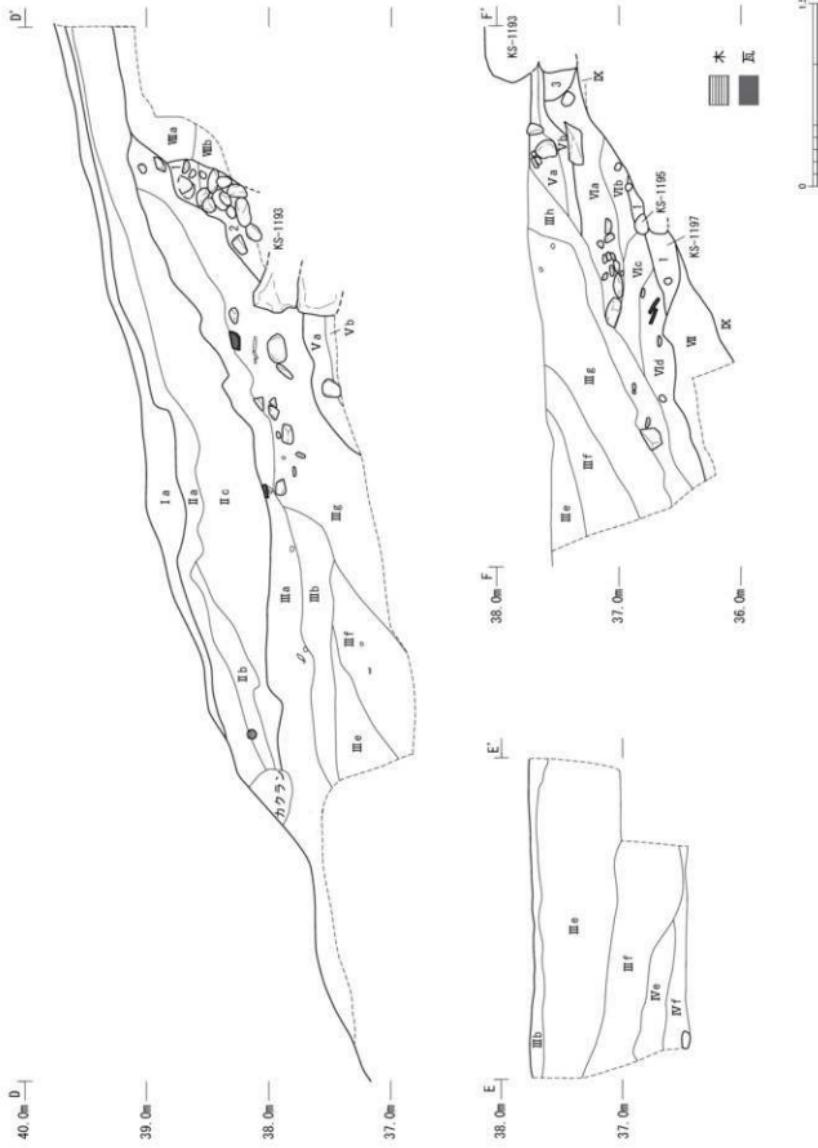
第11図 2区近・現代遺構平面図



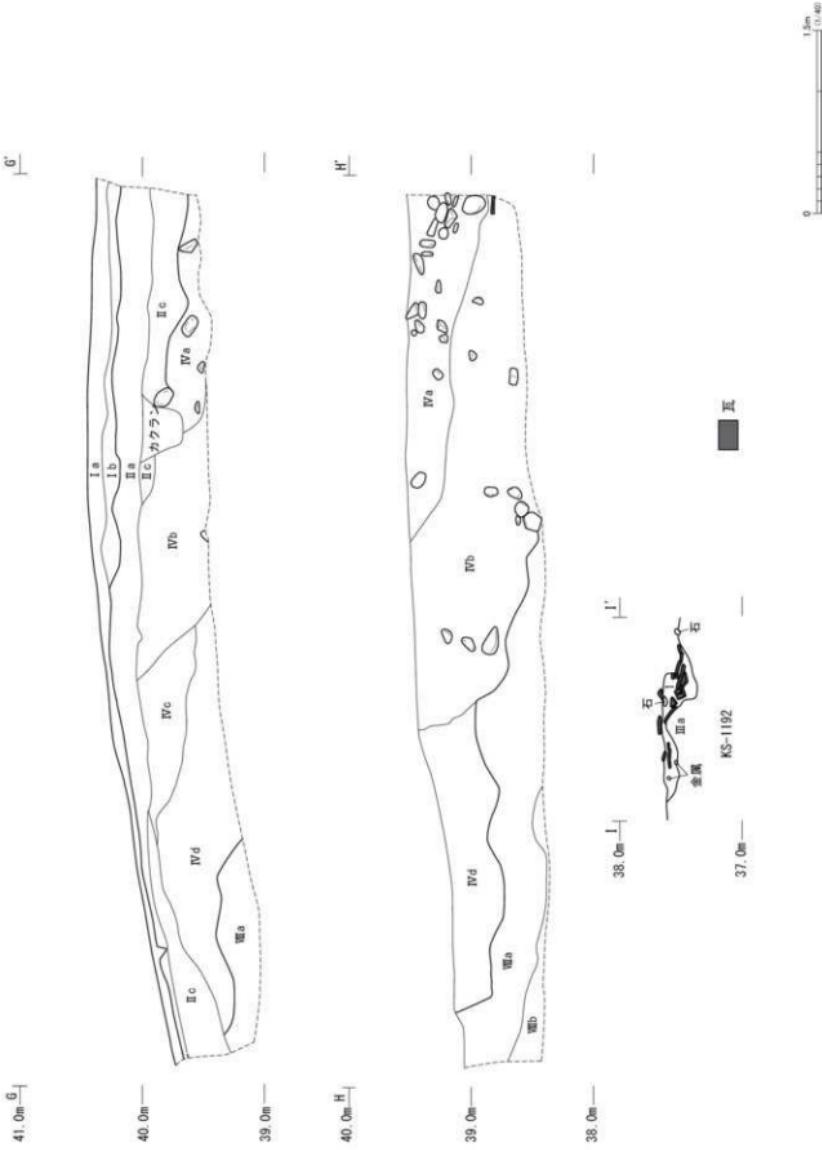
第12図 2区平面図



第13図 2区断面図(1)



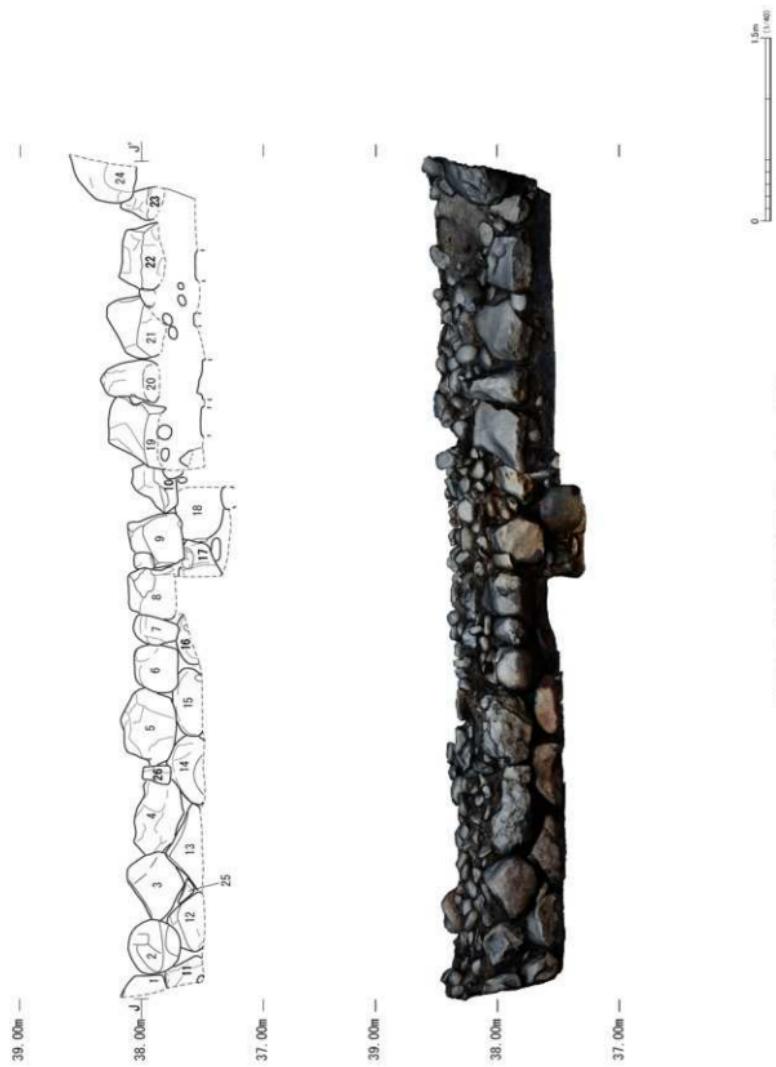
第14図 2区断面図(2)



第15図 2区断面図(3)

第5表 2区土層注記表

遺構・層位		土色		土質	土性 しまり	備考
		土色No.	土色			
表土	I a	10YR3/4	暗褐色	シルト	なし	現表土
	I b	10YR7/6	明黄褐色	シルト	なし	径0.5～1cmの礫を含む
近・現代盛土	II a	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	なし	径0.5～1cmの亜炭を多量に含む 凝灰岩片を少量含む
	II b	10YR7/6	明黄褐色	砂質シルト	ややあり	炭化物粒を微量に含む
	II c	10YR6/6	明黄褐色	シルト	あり	径0.5～1cmの凝灰岩片を多量に含む 亜炭を少量含む
	II d	10YR6/4	にぶい黄褐色	シルト	あり	径0.5～1cmの礫を多量に含む 炭化物粒を含む 瓦片を含む 亜炭を少額含む
石垣改変後の近代盛土②	III a	10YR4/2	灰黄褐色	粘性シルト	ややあり	径1.5～5cmの礫を含む 焼土を含む ガラス・御影石を含む
	III b	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘性シルト	ややあり	炭化物粒を多量に含む 凝灰岩片が少量含む 焼土・亜炭を含む
	III c	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	あり	酸化鉄が上面に薄く堆積する 層は固く締まっている
	III d	10YR6/3	にぶい黄橙色	粘性シルト	あり	径0.5～2cmの礫を多量に含む 瓦・御影石を含む
	III e	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘性シルト	ややあり	酸化鉄粒・炭化物粒を多量に含む
	III f	10YR3/2	黒褐色	粘性シルト	ややあり	径0.5～5cmの凝灰岩片を含む 炭化物粒を多量に含む 亜炭・板ガラスを含む
	III g	10YR4/3	褐色	粘性シルト	なし	径2～14cmの礫を多量に含む 凝灰岩片を微量に含む 瓦・ガラスを多量に含む
	III h	10YR4/2	灰黄褐色	粘性シルト	あり	径40～50cmの石を含む 径2～10cmの礫を多量に含む 酸化鉄を多量に含む
	IV a	10YR4/2	灰黄褐色	粘性シルト	ややあり	径5～15cmの礫を含む 炭化物・酸化鉄を多量に含む ガラスを含む
石垣崩落後の近代盛土③	IV b	10YR5/2	灰黄褐色	粘性シルト	あり	径2～10cmの礫を含む 酸化鉄粒を多量に含む 瓦片・ガラスを含む
	IV c	10YR5/8	黄褐色	砂質シルト	なし	径2～10cmの凝灰岩ブロックを多量に含む 炭化物を含む 瓦片・ガラス片を含む
	IV d	10YR5/2	灰黄褐色	粘性シルト	ややあり	径1～5cmの礫を含む 凝灰岩片・酸化鉄粒を含む 瓦片・ガラスを含む
	IV e	10YR7/4	にぶい黄橙色	粘性シルト	あり	径5～20cmの礫を含む 凝灰岩ブロック・酸化鉄粒を多量に含む ガラス片を含む
	IV f	10YR3/2	黒褐色	粘性土	ややあり	径40～50cmの石を含む 径1～20cmの礫を含む 御影石・ガラス片を含む
	V a	10YR7/4	にぶい黄橙色	シルト	あり	上面がやや硬く締まる 凝灰岩粒を多量に含む 酸化鉄粒を含む
近世の整地土	V b	10YR6/8	明黄褐色	粘性シルト	あり	径1～20cmの礫を含む 凝灰岩を多量に含む 酸化鉄粒を上面に多量に含む
	VI a	10YR7/4	にぶい黄橙色	シルト	あり	凝灰岩片を少量含む 酸化鉄粒を含む
近世の整地土	VI b	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	あり	径0.5～1cmの炭化物を含む 凝灰岩片・酸化鉄粒を含む
	VI c	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘性シルト	あり	径1～10cmの礫を含む 凝灰岩片・酸化鉄粒・炭化物粒を含む 瓦を含む
	VI d	10YR6/8	明黄褐色	シルト	あり	凝灰岩片を少量含む 酸化鉄粒を含む
近世の整地土	VII	10YR6/6	明黄褐色	粘性シルト	あり	上面がやや硬く締まる 径0.5～1cmの凝灰岩片を含む 酸化鉄粒を含む
近世の整地土	VIII a	10YR6/4	にぶい黄橙色	粘性シルト	あり	径0.1～0.5cmの凝灰岩ブロックを含む 炭化物を含む
	VIII b	10YR7/4	にぶい黄橙色	粘性シルト	あり	径0.5～2cmの凝灰岩ブロックを含む 炭化物を含む
自然堆積土	IX	2.5YR7/1	明オリーブ灰	シルト質砂層	あり	凝灰岩片を少量含む
KS-1192 土坑	I	10YR3/2	黑褐色土	粘性シルト	あり	酸化鉄のブロックを少量含む 瓦・鉄製品を多量に含む
	I	10YR6/6	明黄褐色	シルト	なし	径5～15cmの礫を多量に含む 凝灰岩片を多量に含む
KS-1193 石垣	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質土	なし	径10～20cmの礫を多量に含む
	3	10YR3/4	暗褐色	粘性シルト	あり	凝灰岩片を少量含む 酸化鉄粒を含む
	1	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	あり	凝灰岩片を含む
KS-1195 集石	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	なし	炭化物粒を少量含む
KS-1197 土坑	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	なし	炭化物粒を少量含む



第16図 KS-1193 石垣立面図・オルソ写真

(3) KS-1194 石敷

調査区北東部で確認した石敷で、径3～8cmの円礫が敷き詰められている。V a層上面に構築されている。石敷の範囲は、東西1m以上、南北80cm以上で、北側は調査区外に延びる。遺構の時期は、V a層から19世紀前半から中頃の大堀相馬産土瓶（図版5-27）が出土し、また遺構上面で板ガラス片を検出していることから、19世紀からIV層上面が露出していた時期までと考えられる。

(4) KS-1195 集石

調査区中央部サブトレーンチ内のIX層上面で確認した。南東から北西方向に延びる帯状の集石である。規模は、東西40cm以上、南北60cm以上で、さらに調査区外の南東から北西に延びる。径20～24cmの円礫が用いられる。集石背面から、瓦が1点出土している。遺構の時期は、KS-1193石垣構築以前と考えられる。

(5) KS-1197 土坑

調査区中央部サブトレーンチ内で確認し、VII層上面から掘り込まれている。規模は東西80cm、南北50cm以上、深さ30cm、平面形状は部分的な検出のため不明であり、さらにサブトレーンチ外の南東から北西に延びる。

遺構の時期は、KS-1193石垣構築以前と考えられる。KS-1195集石と隣接し一連の遺構の可能性がある。遺構堆積土から、瓦が1点出土している。

5. 出土遺物

ここでは主に遺構外から出土した遺物について記述する。具体的な遺物の出土点数については第6表に示した。

(1) 磁器

第17図1は、肥前産の碗である。第17図2は、草花文に太湖石が施された肥前産の碗で18世紀代と想定される。第17図3は、肥前産の碗で18世紀代のものである。第17図5は、蔓草文・唐草文が施された肥前産の皿で、18世紀前半のものである。第17図8は、波佐見産の皿で、見込みに蛇の目釉剥ぎが見られる。年代は、17世紀末期から18世紀初めである。第18図12は、瀬戸美濃産の窓入りの白磁角皿で、内面には人物と花と思われる文様が施される。年代は19世紀中頃以降である。図版5-13は、肥前産の青磁皿か青磁鉢で、雷文・草文が施されている。年代は17世紀後半である。

(2) 陶器

第18図15は、19世紀代の堤産と思われる豆甕で、鉄軸が施釉されている。第18図21は、瀬戸産と思われる18世紀代の蓋物の蓋で、外面に鉄軸が施釉されている。第18図24は、19世紀代の大堀相馬産の猪口で、外面が灰釉で施釉されている。第18図22は、19世紀前半から中葉の大堀相馬産の土瓶である。外面に灰釉が施釉され、その上から鉄軸・緑釉により絵が描かれている。

(3) 土師質・瓦質土器

第18図27の土師質土器は、燈明皿で、内面には油煙による煤が付着されている。第18図28の瓦質土器は、蚊遣りの脚で、獅子の顔をかたどったものと考えられる。

(4) 瓦

総計256点出土した。区毎の出土傾向を見ると、1区では、多くがII、III層から出土している。2区では、KS-1192から125点出土しており、2区全体の56%を占める。近世と考えられるV層、VI層からはそれぞれ21点、10点出土しており、2区全体の14%を占める。2区では丸瓦、平瓦を中心に軒丸瓦、軒平瓦、棧瓦、輪違い、面戸瓦、隅瓦、二の平瓦が出土している。その内14点を図示している。

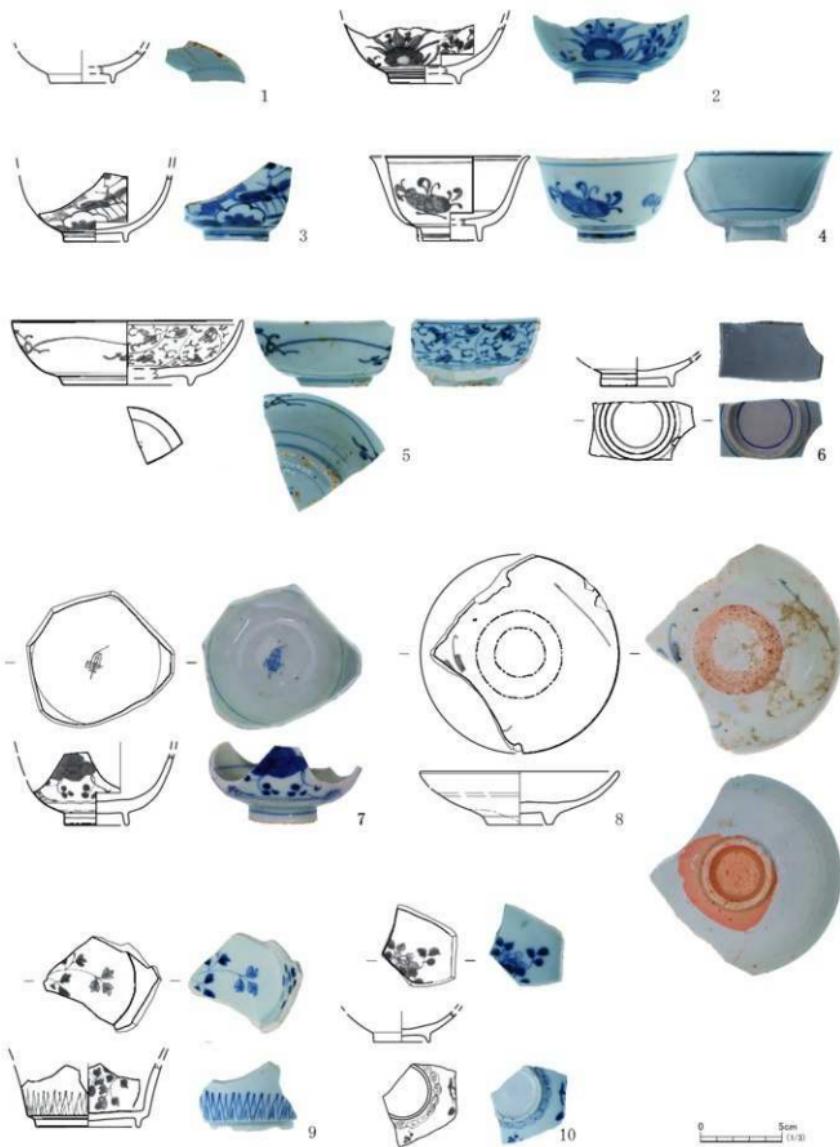
第20図1・2は軒丸瓦で、文様は九曜文である。いずれもKS-1192土坑から出土している。第20図3・4は軒平瓦で、文様の中心飾りが雀文、三引両文である。4はV a層から出土している。第20図5は丸瓦で、凸面には縦ケズリが見られる。第20図7は平瓦であり、側面に刻印がある。

(5) 金属製品

金属製品では、2区からは、第21図18～21の鉄釘4点が出土しており、いずれも断面の形状は角である。その他、第21図17のキセルなどが出土している。図版7-13は、第二師団関連と思われる弾丸である。

第6表 第38次調査出土遺物集計表

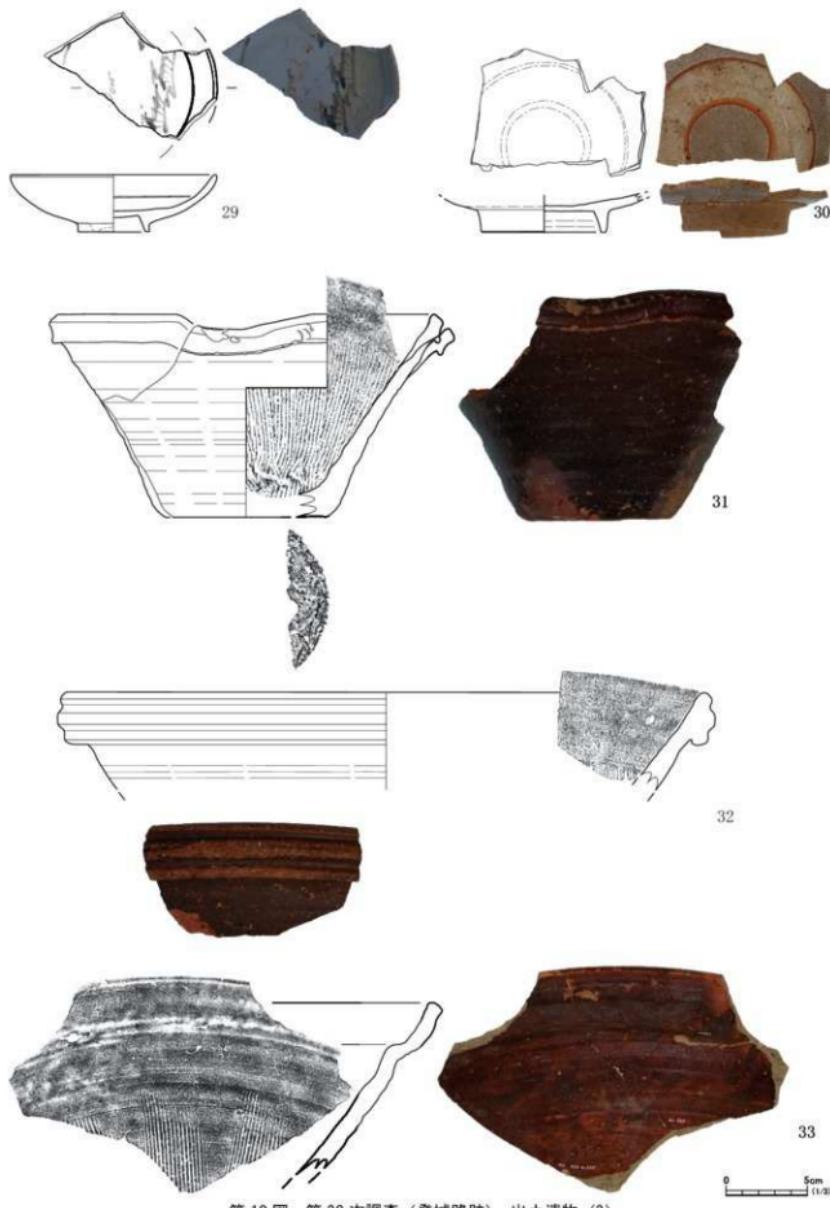
区	扇形・圓錐	磁器	陶器	瓦質土器	瓦質土器	ガラス製品	金属製品	石製品	総計
I	I	2	2	3	2	8	1	1	14
	II	11	14	10	10	2	3	1	46
	III				14				14
	その他	1	1						2
	小計	14	17	3	2	32	3	4	76
	I	10	14	2	1	2			29
II	II	2	2	1	1		1		6
	III	116	142	29	7	34	8	1	337
	IV	16	31	1	1	5	1		55
	V	1	6	2	21			1	31
	VI	2	3	1	10				16
	KS-1192 土壺		2	1	125		2	1	131
III	KS-1193 石瓶	1	2		1				4
	KS-1195 鑿石				1				1
	KS-1197 土壺				1				1
	その他	17	17	1	1	26			62
	小計	165	219	36	12	224	3	11	673
	総計	179	236	39	14	256	6	15	749



第17図 第38次調査（登城路跡）出土遺物（1）



第18図 第38次調査（登城路跡）出土遺物（2）



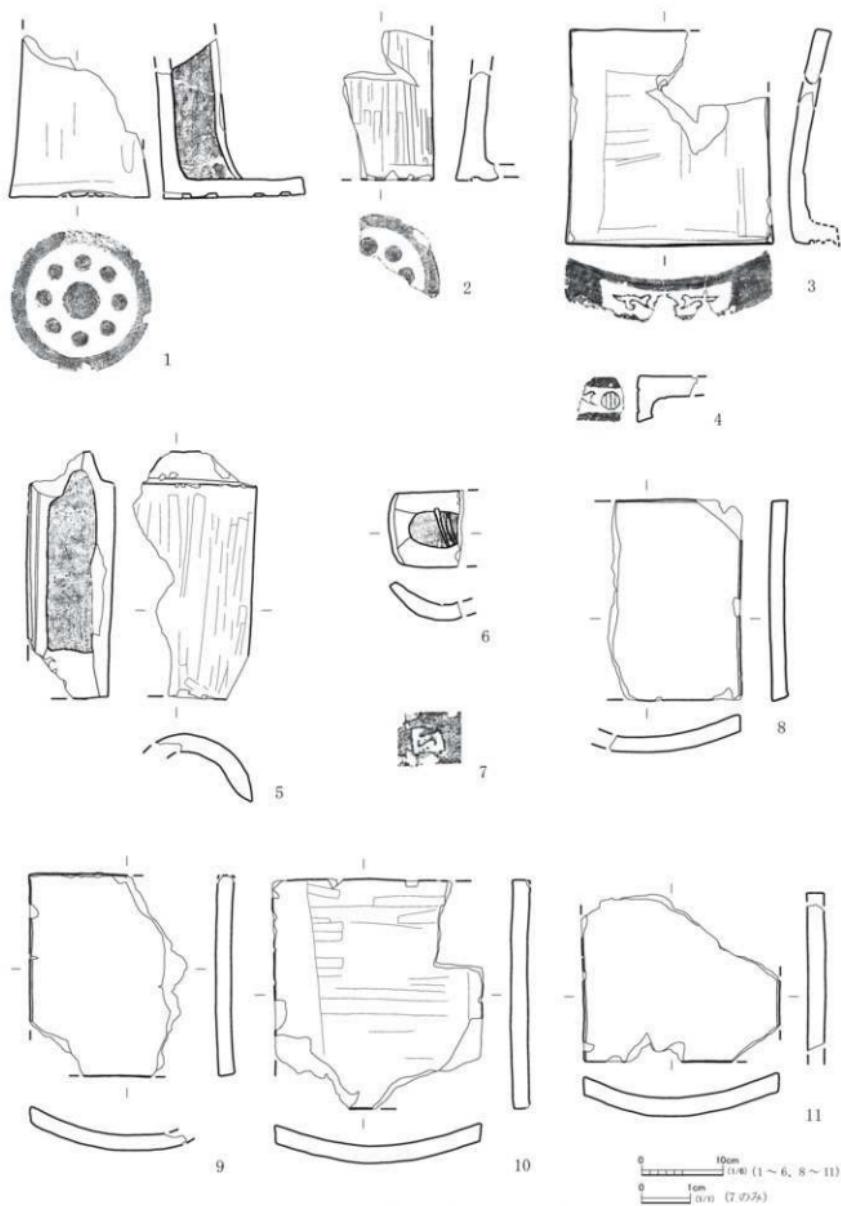
第19図 第38次調査（登城路跡）出土遺物（3）

第7表 第38次調査（登城跡）出土磁器観察表

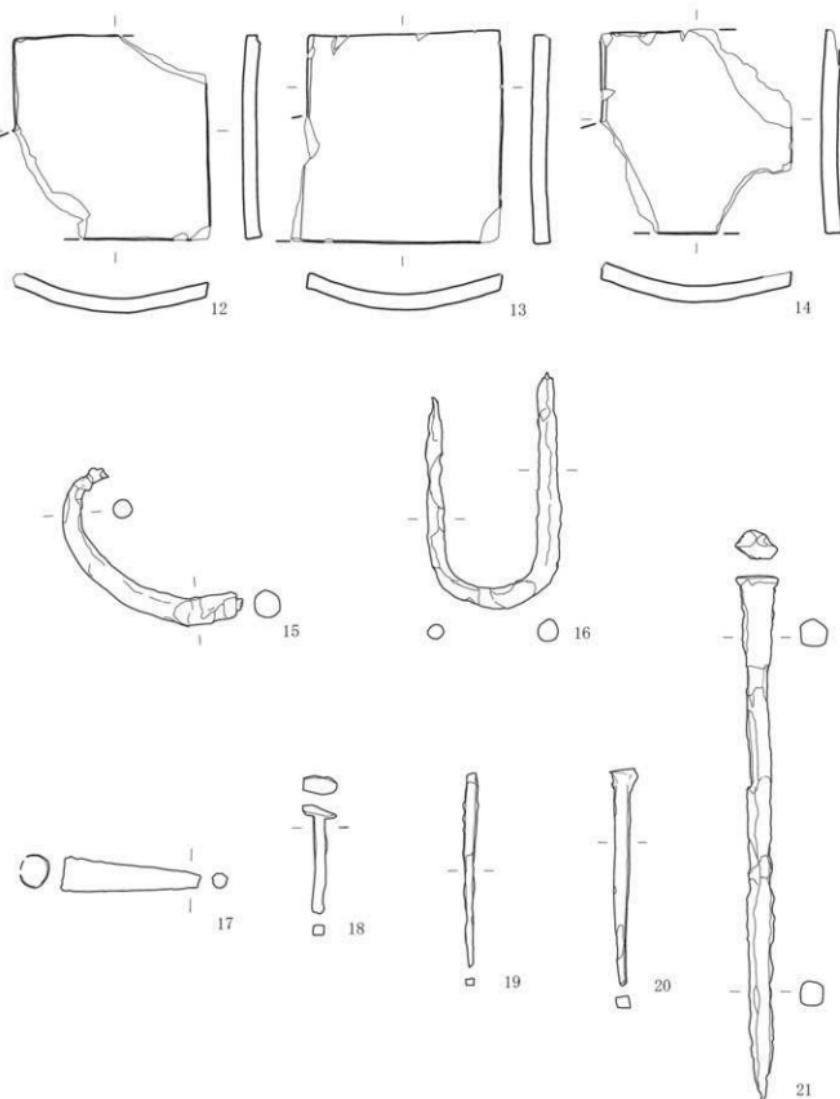
区分番号	遺物番号	種類	遺構・層位	生産地	器種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	釉薬・文様等	備考	写真図版
1	291	染付	2区 東西サブトレンチ III g	肥前	瓶	江戸時代	(~)	(40)	(20)			
2	37	染付	2区 南東部 III d	肥前	瓶	18c ?	(~)	(44)	(35)	草花文、太潤石文		
3	321	染付	2区 東西サブトレンチ VI b	肥前	瓶	18c	(~)	(40)	(40.5)			
4	303	染付	2区 北東部 III d	肥前	瓶	18c 前半～中葉	(98)	(40)	52	草花文		
5	377	染付	2区 南東部 III g	肥前	瓶	18c 前半	(143)	(80)	30	外面草文、内面唐草文		
6	262	染付	2区 北東部 III d	肥前	瓶	江戸時代	(~)	(46)	(17)			
7	24	染付	2区 南東部 III b	肥前	瓶	18c 前半～中葉	(~)	40	(44)	見込に「寿」?		
8	27	染付	2区 南東部 III b	波佐見	瓶	17c 後半～18c 初	123	40	32.5	見込の目録割合		
9	263	染付	2区 北東部 III d	肥前	鉢	18c ~ 19c	(~)	(64)	(39)	草文		
10	177	染付	2区 南東部 III d	肥前	小型鉢	18c 後半?	(~)	(35)	(19)	外面松竹梅、内面柿		
11	120	染付	2区 南東部 III b	肥前	矮折鉢	18c	(94)	(54)	22	草花文か?		
12	7	白磁	2区 IV b	瀬戸美濃	角皿	19c 南須~	日経91	瀬戸島X	39	人物と花?		
写	180	染付	2区 南東部 III b	肥前	瓶	18c ?	(~)	(68)	(17)	高台内「富貴長春」?	5-1	
写	86	染付	2区 北東部 III d	肥前	瓶	17c 中期	(~)	(80)	(13)	見込みに魚文	5-2	
写	178	染付	2区 南東部 III b	肥前	瓶	18c ~ 19c	(~)	(72)	(25)	高台内に縦あり	5-3	
写	535	染付	2区 南東部 III b	瀬戸美濃	瓶	18c 前半～中葉	(~)	(40)	(37)	見込に「寿」?	5-4	
写	304	染付	2区 南東部 III f	肥前	瓶	18c 前半?	(192)	(~)	(43)	弦文	5-5	
写	91	染付	2区 南東部 I a	肥前	小型碗	17c ~ 18c 半	(80)	(~)	(23)	コシニヤク印押に 有る柄文	5-6	
写	533	染付	2区	肥前	瓶	17c 末～18c 前半	(100)	(66)	18	内面：捻文、四重 團襷 外面：模草文	くちさび	5-7
写	93	染付	2区 南東部 I a	肥前	瓶	17c 後半～18c 初	(140)	(~)	(25)	内面：捻文、四重 團襷 外面：模草文	5-8	
写	416	染付	2区 南東部 III f	肥前	蓋物の蓋	18c 前半?	(100)	(~)	(16)	頬唐草文	5-9	
写	236	染付	2区 南東部 III f	肥前	瓶	18c ?	(140)	(~)	(28)	内面：捻文	5-10	
写	74	染付か 白磁	2区 北東部 IV d	肥前	瓶	17c 代?	(140)	(~)	(22)	内面：捻文	5-11	
写	364	染付	2区 北東部 III d	肥前	瓶	16c 末～17c 初	(~)	(~)	(~)	内面：草文	5-12	
写	1	青磁	2区 III g	肥前	皿	17c 後半	(~)	(~)	(32)	弦文、草文	5-13	
写	326	染付	2区 東西サブトレンチ VI d	肥前	つる首瓶	19c 前半	(~)	(~)	(64)	唐草文	5-14	

第8表 第38次調査（登城跡）出土陶器観察表

区分番号	遺物番号	種類	遺構・層位	生産地	器種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	釉薬・文様等	備考	写真図版
13	240	陶器	2区 西北部 III f	大堀相馬	小环	18c 後半	(54)	(24)	29	白釉輪		
14	320	陶器	2区 東西サブトレンチ VI b	堤	ミニチュア の蓋	19c	(~)	(38)	厚み4	船形		
15	201	陶器	2区 南東部 III e	壁段?	豆甕	19c	(~)	(24)	(30)	白釉		
16	299	陶器	2区 北東部 IV e	大堀相馬	小环	18c 後半~	(~)	24	(19)	白釉輪	軟質旋削陶器	
17	63	陶器	2区 北東部 IV d	大堀相馬	小环	18c 後半	(59)	(30)	(33)	白釉輪		
18	525	陶器	2区 東西サブトレンチ VI f	大堀相馬	小环	18c 後半	(~)	26	(33)	白釉輪		
19	376	陶器	2区 南東部 III f	大堀相馬	瓶	18c	(~)	(50)	(27)	灰釉		
20	319	陶器	2区 東西サブトレンチ VI a	肥前	瓶	18c	(~)	(48)	(25)		京焼風陶器	
21	110	陶器	2区 南東部 I a	瀬戸?	蓋物の蓋	18c	64	34	23	つまみ棒		
22	22	陶器	2区 北東部 IV e	大堀相馬	土瓶	19c 前半～中葉	(80)	(~)	(35)	捻は灰釉、縁稍 地は灰釉		
23	401	陶器	2区 東西サブトレンチ VI f	肥前	瓶	17c 後半	(~)	46	(39)	灰釉		
24	367	陶器	2区 南東部 III f	大堀相馬	猪口	19c	(80)	(~)	(48)	灰釉		
25	197	陶器	2区 南東部 III b	大堀相馬	瓶	18c	(~)	(37)	(18)	灰釉		
26	3	陶器	2区 KS-1193(?)	美濃	天日盃	16c 後半～17c 初	(~)	50	(29)	内反り高台	高台に欲化装	
27	234	土器質土器	2区 北東部 III b	大堀相馬	打明里	江戸時代	(66)	(40)	17	内面に油拂に作る煤付有		
28	89	瓦質土器	2区 北東部 VI a	瀬戸?	最高輪	最高輪	(~)	(~)	高さ			
29	9	陶器	2区	大堀相馬	蚊取り	江戸時代	(47)	(~)	(58)	内面：飛跑、山水文		
30	415	陶器	2区 南東部 III f	肥前	瓶?	17c 後半	(~)	(38)	(21.5)	見込蛇の目軸跡 縁から底部にかけて露筋		
31	274	陶器	2区 北東部 II d	櫛?	ナリ鉢	19c	(232)	(100)	150	灰釉		
32	259	陶器	2区 北東部 III d	不明?	ナリ鉢	18c ~	(400)	(~)	(62)	灰釉		
33	547	陶器	2区 南東部 III b	美濃	ナリ鉢	18c 前半	(~)	(~)	(105)	灰釉		
34	361	陶器	2区 西北部 IV a	美濃	変形皿	17c 中頃	(~)	(20)	洞深斜		5-15	
35	331	陶器	2区 東西サブトレンチ VI f	志野	碗	17c 初	(90)	(~)	(23)	長石袖	5-16	
36	426	陶器	2区 中央～北西端 V b	大堀相馬	土瓶	19c 前葉～中葉	(200)	(~)	(36)	灰釉	5-17	
37	15	陶器	2区	大堀相馬	瓶	18c	(~)	(50)	(18)		5-18	
38	128	陶器	2区 南東部 III b	大堀相馬	瓶	19c 前葉～中葉	(~)	(60)	(23)	白釉輪に縞模造し	5-19	
39	198	陶器	2区 南東部 III b	大堀相馬	小环	18c	(~)	(34)	(35)	灰釉	5-20	
40	338	陶器	2区 南東部 III f	肥前	16c 末～17c (94)	(~)	(~)	(26)	铁筋	京焼風陶器	5-21	
写	113	陶器	2区 南東部 I a	大堀相馬	袋物	19c 前葉～中葉	(~)	(50)	(41)	内面：铁袖 外面：铁袖	5-22	
写	541	陶器	2区	大堀相馬	中皿	18c	(~)	(~)	(38)	内面に灰釉輪造し	5-23	
写	538	陶器	2区	瀬戸?	?	18c	(160)	(~)	(55)	外面：飞跑	5-24	
写	285	陶器	2区 南東部 V b	?	江戸時代	(104)	(~)	(54)			5-25	
写	287	陶器	2区 南東部 V a	大堀相馬	土瓶	19c 前葉～中葉	(~)	(~)	(42)		5-26	
写	16	陶器	2区	大堀相馬	土瓶	19c 前葉～中葉	(~)	(~)	(58)		5-27	
写	374	陶器	2区 南東部 III f	大堀相馬	土瓶	19c 前葉～中葉	(~)	(~)	(51)		5-28	
写	237	陶器	2区 北西端 IV a	大堀相馬	瓶	18c ~	(~)	(~)	(73)	铁袖	5-29	



第20図 第38次調査（登城路跡）出土遺物（4）



0 10cm (1/6) (12 ~ 14)
0 2cm (1/2) (15 ~ 21)

第21図 第38次調査（登城路跡）出土遺物（5）

第9表 第38次調査(登城路跡)出土瓦観察表

箇中 番号	遺物 番号	種類	文様	遺構・層位	法量(mm)	重さ (g)	備考	写真 図版
1	358	軒丸瓦	九曜文	2区 KS-1192	長さ(195) 厚さ 18 瓦当径(174) 内区径(131) 周縁幅 22 周縁深さ 5 瓦当	1580	9点接合	6-1
2	359	軒丸瓦	九曜文	2区 KS-1192	長さ(133) 厚さ 23 瓦当径(52) 内区径(32) 周縁幅 19 周縁深さ 4	920		6-2
3	483	軒平瓦	模文	2区 KS-1192	瓦当幅 255 瓦幅(047) 長さ 264 弧深 31 厚さ 21 瓦当高さ 85	2360	7点接合	6-3
4	449	軒平瓦	三引両文	2区 北東部 V a	瓦当幅(60) 後幅(--) 長さ(72) 弧深(--) 厚さ 26 瓦当高さ(57)	160		6-6
5	482	丸瓦		2区 KS-1192	前幅(70) 後幅(152) 長さ 304 高さ 81 厚さ 22 玉縁先幅(37) 玉縁長さ 40	1500	2点接合	6-5
6	514	面瓦		2区	幅(88) 高さ 94 高さ 47 厚さ 19	240		6-10
7	493	平瓦		2区 KS-1192	前幅(65) 後幅(--) 長さ(88) 高さ(--) 厚さ 22	180	刻印あり	6-7
8	484	平瓦		2区 KS-1192	前幅(140) 後幅(126) 長さ 246 高さ 26 厚さ 18	1280	5点接合	6-9
9	481	平瓦		2区 KS-1192	前幅(83) 後幅(121) 長さ 247 高さ 53 厚さ 19	1300	3点接合	6-11
10	486	平瓦		2区 KS-1192	前幅(251) 後幅(221) 長さ 282 高さ 28 厚さ 20	2040	7点接合	7-1
11	485	平瓦		2区 KS-1192	前幅(182) 後幅(--) 長さ(205) 高さ 30 厚さ 22	1490	2点接合	6-12
12	564	棟瓦		2区 KS-1192	前幅(151) 後幅(126) 長さ 249 高さ(48) 厚さ 17 前切込み幅(--) 前切込み長さ(--) 後切込み幅(--) 後切込み長さ 110	1520	9点接合	7-3
13	566	棟瓦		2区 KS-1192	前幅(256) 後幅(235) 長さ 260 高さ 44 厚さ 19 前切込み幅(--) 前切込み長さ(--) 後切込み幅(--) 後切込み長さ 111.5	1980	10点接合	7-4
14	557	棟瓦		2区 KS-1192	前幅(75) 後幅(135) 長さ 254 高さ 30 厚さ 20 前切込み幅(--) 前切込み長さ(--) 後切込み幅(--) 後切込み長さ(107)	1120	6点接合	7-2
写	360	軒平瓦		2区 KS-1192	瓦当幅(242) 後幅(222) 長さ 275 弧深 36 厚さ 21 瓦当高さ(20) 瓦当厚さ(--) 内区高さ(155) 周縁深さ 4	2680	5点接合	6-4
写	558	丸瓦		2区 KS-1192	後幅(156) 長さ(166) 高さ(82) 厚さ 23 玉縁先幅(92) 玉縁長さ 21	900	2点接合	6-8
写	491	二の平瓦		2区	後幅(--) 後幅(185) 高さ(192) 高さ(96) 厚さ 20	1000		7-5
写	500	面瓦		2区 東西サブトレーナ V	幅(188) 長さ(191) 厚さ 32 瓦幅(--) 瓦長さ(118) 瓦下幅(--) 瓦下厚さ(--)	1960	2点接合	6-13

第10表 第38次調査(登城路跡)出土金属製品観察表

箇中 番号	遺物 番号	種類	遺構・層位	法量(mm)	重さ (g)	備考	写真 図版
15	576	把手?	1区 東部 II a	全長(68) 最大幅 11.5	35	断面丸	7-6
16	573	不明	2区 北壁 II d	全長 96 最大幅 9 × 8	52	断面丸 不整形の釘状のもの	7-7
17	570	キセル	2区 南東部 III f	全長 57 最大幅 12 吸口径 6	10		7-8
18	569	鉄釘	2区 南東部 III f	全長 44 針部幅 5 頭部幅 7 × 10.4	6	断面四角 形状角	7-9
19	563	鉄釘	2区 III d 層	全長 79 最大幅 6 頭部(?)	5	断面角	7-10
20	562	鉄釘	2区 III d 層	全長 89 最大幅 6 頭部幅(--) 頭部形状(--)	10	断面角	7-11
21	561	鉄釘	2区 KS-1192	全長 210 最大幅 14 頭部幅 17 × 12	80	断面角 形状角?	7-12
22	577	弾丸	1区 I a	径 6 長さ(31)	19		7-13

6.まとめ

今回の第38次調査(登城路跡第5次)では、2箇所の調査を行った。1区は、路面上の広がりを確認することを目的とし、東丸(三の丸)内の蔵屋敷跡と登城路跡の境界付近を調査し、2区では、巽門前の構形の範囲確認から、巽門西側石垣の南側延長部を確認するという目的で調査を行った。

調査の結果、1区では、多数の近現代の搅乱により、近世の遺構を検出することが出来なかった。近現代の遺構としては、大型のコンクリート製排水溝を確認した。この排水溝は、昭和58年(1983)の東丸(三の丸)調査・巽門跡調査でも確認されており、昭和32年(1957)以降に工事された東丸(三の丸)北西端を起点に南北に巽門から追廻側に流す排水路と考えられる。

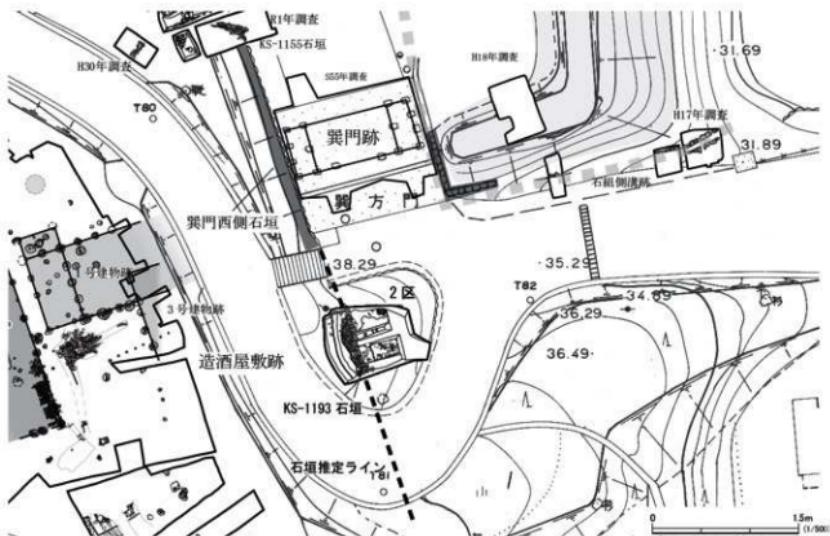
2区では、巽門西側石垣の南側延長部を確認し、構形の範囲を捉える手がかりが得られた。その他、石垣構築以前と想定される集石1基と土坑1基を確認し、これらは石垣ないし石積みに伴う根切遺構の可能性も考えられ、今後、周辺の調査で詳細を確認することが課題である。

以下では、2区で確認した巽門西側石垣の延長部と考えられるKS-1193石垣の特徴と課題について述べる。

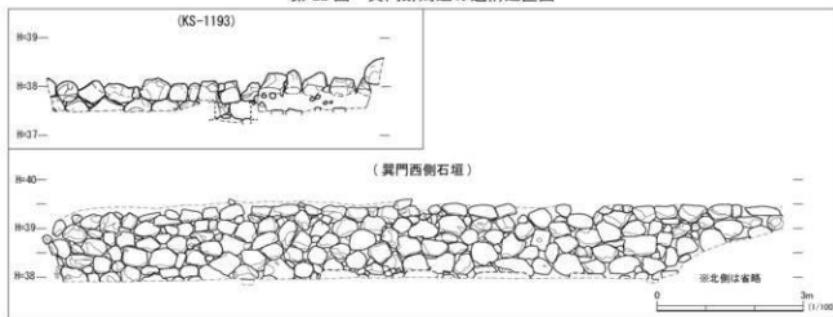
巽門西側石垣の南側延長部(KS-1193石垣)

今回確認したKS-1193石垣は、現存する巽門西側石垣から南に10m離れた地点で確認した。巽門西側石垣と同規模の石材を使用した野面積みである点が一致し、さらに巽門西側石垣の延長上にあることから、巽門西側石垣の南側延長部と考えられる。

KS-1193石垣の当初の高さは、近代に搅乱を受け残存した2段分の検出で、詳細な高さを断定できない状況である。現存している巽門西側石垣の天端面が一定の高さで統一であれば、残存部の標高値の比較より、今回のKS-1193石



第22図 羽門跡周辺の遺構配置図



第23図 KS-1193 石垣・羽門西側石垣立面図

石垣の残存している2段分からさらに約1.4mあったことは想定できる（第23図）。

石垣の年代については、根石を覆う整地土から19世紀代の遺物が出土しており、19世紀以降と推定した。近世における修復履歴が絵図・史料では元禄7年（1694）しかみられないが、近世後半に構築ないし修復している可能性が指摘できる結果となった。しかし羽門西側石垣の構築年代は、KS-1193石垣のみで断定するには難しく、各所で何度も積みなおしたり修復している可能性が想定され、今後の周辺の調査と石垣が残存している箇所で更なる検討が必要である。また、折形の南端となる羽門西側石垣の南限を確認することも今後の課題となる。

引用・参考文献

- 九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000
- 仙台市教育委員会『仙台城三ノ丸跡』仙台市文化財調査報告書第76集 1985
- 仙台市教育委員会『仙台城本丸跡』1次調査 第2分冊『遺構編』仙台市文化財調査報告書第298集 2006
- 仙台市教育委員会『仙台城跡東日本大震災復旧事業報告書 第2分冊』仙台市文化財調査報告書第451集 2016
- 仙台市教育委員会『仙台城15』仙台市文化財調査報告書第485集 2020
- 藤井良輔『瀬戸・美濃焼窯製品の生産と流通』『江戸時代のやきもの』2006
- 山崎信二『近世瓦の研究』同成社 2009

図版1 第38次(登城路跡)



1区調査前(西から)



1区調査区全景(西から)



1区東壁断面(西から)



1区南壁断面東部(北から)



1区南壁断面中央部(北東から)



1区南壁断面中央部(北東から)



1区南壁断面西部(北から)



1区南壁断面西部(北から)

図版2 第38次(登城路跡)



1区 KS-1196 排水溝（南東から）



2区調査前（北東から）



2区に隣接する巽門西側石垣と階段（南東から）



2区東壁断面南側（北から）



2区東壁断面北側（北から）



2区西壁断面（南から）



2区南壁断面（北から）



2区サブトレーンチ南壁断面（北から）

図版3 第38次(登城路跡)



2区 北壁断面(南から)



サブトレンチ北壁断面(南から)



2区 KS-1193石垣検出状況(北東から)



2区 KS-1193石垣北側崩落石材(東から)



2区 KS-1193石垣根石検出状況(北東から)



2区 KS-1197土坑検出状況(北東から)



2区 KS-1195集石検出状況(東から)



2区 KS-1194石散(西から)

図版4 第38次(登城路跡)



2区 KS-1192土坑(東から)



2区 KS-1192土坑断面(東から)



2区 KS-1193 石垣天目茶碗出土状況(北東から)



2区 VIa層瓦質土器出土状況(南東から)



2区 III層出土石材 No.1



2区 III層出土石材 No.2

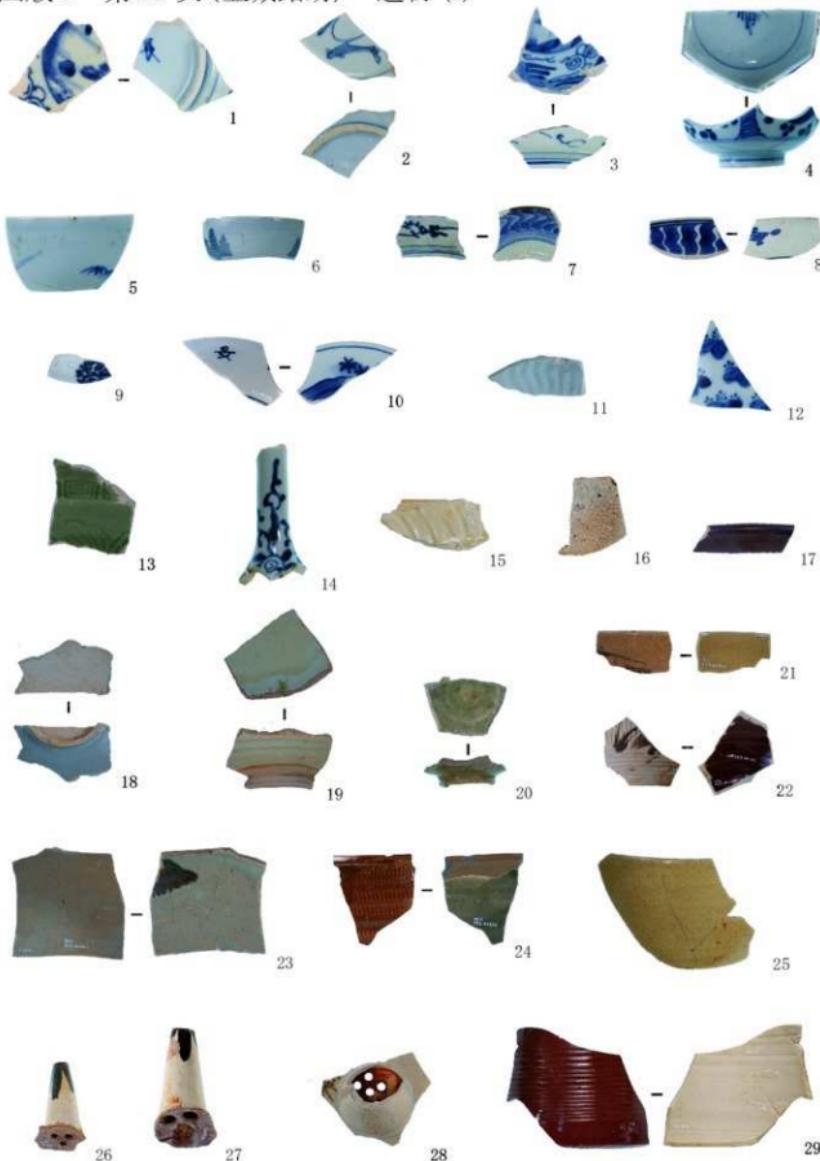


2区 III層出土石材 No.3



2区 出土石材埋め戻し状況(北東から)

図版5 第38次(登城路跡) 遺物(1)



1~29 約1/3

図版6 第38次(登城路跡) 遺物(2)



1~13 約1/6
7刻印 約1/2

図版7 第38次(登城路跡) 遺物(3)



1~5 約1/6、6~13 約1/2

V 第39次調査(東丸(三の丸)土壘第7次)

1. 調査の概要

(1) 調査目的

仙台城跡第39次調査(東丸(三の丸)土壘第7次調査)は、堀や土壘を含む東丸(三の丸)区域の整備(『史跡仙台城跡整備基本計画』令和2年度策定)に向けた確認調査である。今回は、第36次調査で検出した堀跡の延長を確認するとともに、堀跡の西端部を明らかにすることを目的に実施した。調査区は、五色沼に接する土壘の北側に2箇所設定した。

(2) 調査方法

第39次調査では、調査区を6地区に分けての設定を予定していた。1区は土壘中央部の鉤形に折れる西側に、2区は土壘の最西端の予定であったが樹木や根の制約により調査が不可能なため、当初予定地を含む5箇所に分けて設定した。調査を開始するにあたり、災害復旧事業で清水門石垣の測量のために設置された基準点を、巽門跡からトータルステーションを用いて土壘上に移動し使用した。これらの基準点を基に、それぞれの調査区に4箇所の任意の基準点を設置し、世界測地系座標と標高値を求めた。測量などはそれら基準点を使用した。

調査区設定後、掘削作業は人力により行った。基本的に近世上層遺構面の1面のみの調査に留めたが、一部で下層遺構の確認を行っている。遺構の平面図は、調査区周辺に設置した基準点を基に、縮尺20分の1で作図した。土層断面図については、任意の基準点を設定して作図し、設定した基準点の座標値を計測し、平面図に合成した。今回の調査では、写真撮影にデジタルミラーレス一眼を用い、一部の遺構・断面については、35mmカメラでカラーとモノクロのフィルムを用いて撮影した。調査区の埋め戻しは、遺構保存のため全面に不織布を敷き、調査区全体を厚さ10cm程度の山砂で覆い、その後、掘削土を転圧しながら埋め戻して旧状に戻した。



第24図 東丸(三の丸)土壘第7次 調査区配置図

（3）調査経過

現地調査は、6月28日に2-5区の調査区の設定を行い、調査を開始した。7月5日から7月6日まで表土掘削を行い、一時中断し、10月4日に調査を再開した。その際、2-5区が現状変更の申請地より、2-5区の位置が東に15mずれていることがわかった。詳細を県文化財保護課および文化庁に報告し、以降の調査に関しては、現状変更申請面積内に収まる範囲で調査の継続をするよう指導を受けた。その後、10月6日に1区および2-1～4区の調査区の追加設定をした。1区では10月11日から表土掘削を開始し、10月27日に表土の除去を完了した。11月11日にKS-1198 ピットを検出し、全景写真を撮影後、平面図および断面図を作製した。2-1～4区は10月28日に表土掘削を開始し、2-1～3区は11月1日に表土の除去を完了した。2-3区では、ベルト西侧でKS-1201 ピットとKS-1202 ピットを検出した。全景写真撮影終了後、11月4日に平面図および断面図の作成を完了した。2-4区は11月2日に表土の除去を完了し、11月8日に東部にサブトレーナーを設定して掘削を行い、KS-1200 槽を検出した。全景写真撮影終了後、11月11日に平面図および断面図の作製を完了した。2-5区は11月8日に表土の除去を完了し、畔状地形を確認した。11月9日に全景写真を撮影し、11月11日に平面図および断面図の作製を完了した。1～2区の埋め戻しは11月12日に完了し、現地調査を終了した。

2. 基本層序

1区と2区においては堆積状況が異なるため、それぞれの調査区で基本層名を付した。以下、調査区毎にその特徴を記述する。

（1）1区

1区では大別2層、細別4層の基本層を確認した。I層は表土で、II層は近世の土壌積み土の可能性がある。

I層（表土）

3層に細分した。近現代に堆積したと考えられ、近代以降の植栽の痕跡や木、竹の搅乱が顕著である。Ic層はII層の崩落土と考えられる。遺物はIb層からレンガが出土している。

II層（近世の土壌積み土）

黄褐色のシルトを主体とした層で、上面は後世の搅乱により凹凸が顕著である。近世の土壌積み土と考えられる。

（2）2区

2区では大別3層、細別5層の基本層を確認した。I層は表土で、II～III層は近世の土壌積み土の可能性がある。

I層（表土）

2層に細分した。近現代以降に堆積したと考えられ、近代以降の植栽の痕跡や木、竹の搅乱が顕著である。

II層（近世の土壌積み土）

2層に細分した。褐色のシルトを主体とした層である。II層上面で、KS-1201 ピット、KS-1202 ピットを検出している。遺物は瓦が出土している。近世の土壌積み土と考えられる。

III層（近世の土壌積み土）

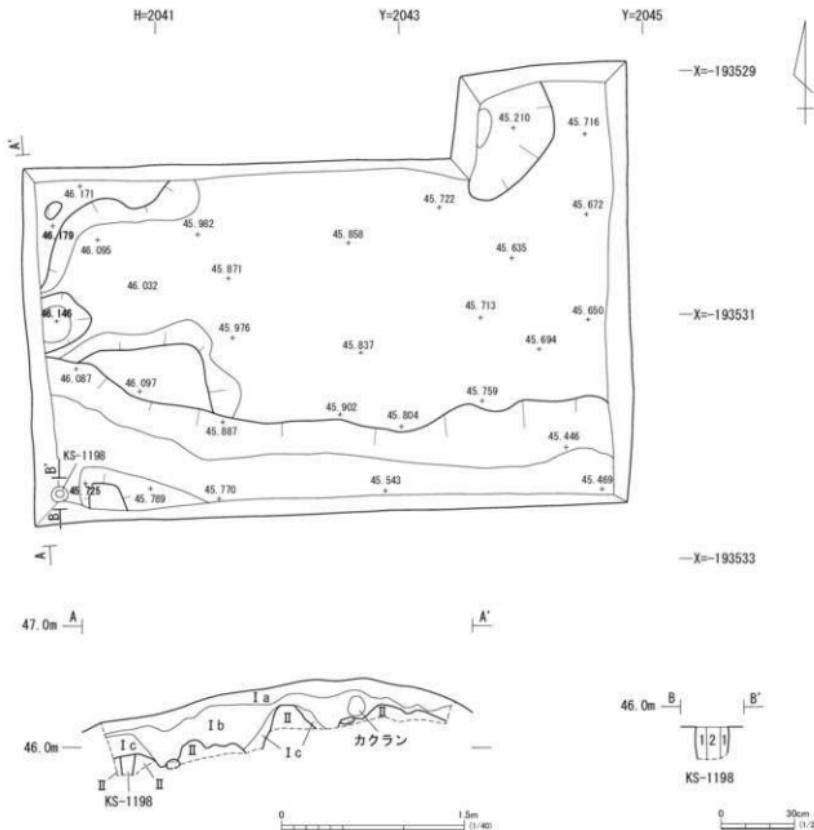
明黄褐色の粘質シルトを主体とした層である。III層上面で、KS-1199 集石、KS-1200 槽を検出している。遺物は出土していない。

3. 1区検出遺構

（1）ピット

KS-1198

南西部のII層上面で確認した。平面形は円形で、規模は直径14cm、深さ15cm以上である。堆積土は、暗褐色シルト層と黒褐色砂質シルト層の2層から成る。堆積土から遺物は出土していない。



第25図 1区平面図・断面図

第11表 1区土層注記表

遺構・層位	土色		土質	土性 しまり	備考
	土色No.	土色			
表土	I a	10YR2/3	黒褐色	シルト	なし 現表土
	I b	10YR3/3	暗褐色	シルト	なし 径5~10cmの礫を少量含む
	I c	10YR4/4	褐色	シルト	ややあり 径1~3cmの礫を少量含む
近世の土 埋積み土	II	10YR5/6	黄褐色	シルト	あり 径2~12cmの礫を微量に含む 10YR5/4にぶい黄褐色粘土を微量に含む 硬炭岩片を少量含む
KS-1198	1	10YR3/4	暗褐色	シルト	なし 径1~4cmの礫を少量含む
	2	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	なし

4. 2区検出遺構

(1) 溝

KS-1200

2-4区東部Ⅲ層上面で確認した。規模は上端幅66cm、下端幅27cm以上、深さ25cm以上、確認した長さは48cmである。調査区外の南西方向と北東方向に延びることが想定される。堆積土から遺物は出土していない。

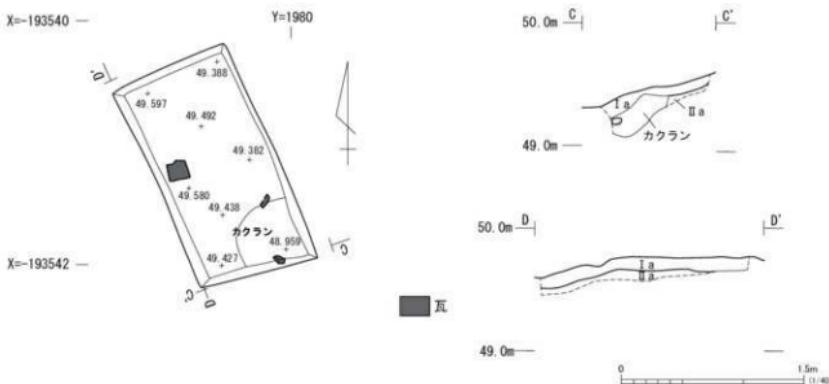
(2) ピット

KS-1201

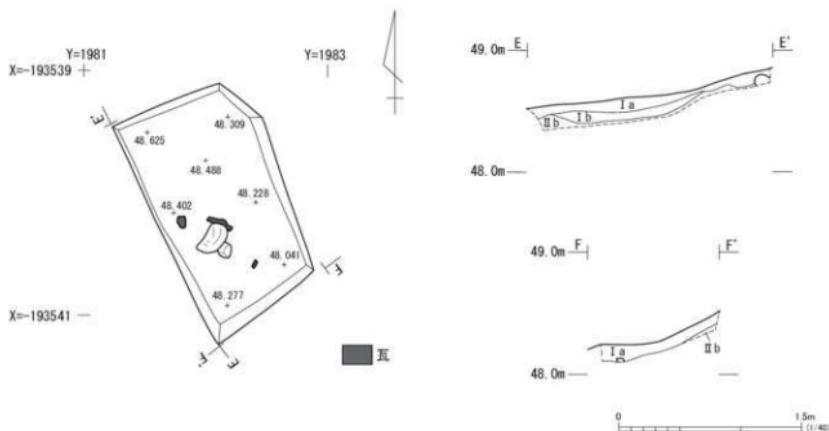
2-3区西部IIa層上面で確認した。堆積土は単層である。平面は円形で、規模は直径10cm、深さ17cm以上である。堆積土から遺物は出土していない。

KS-1202

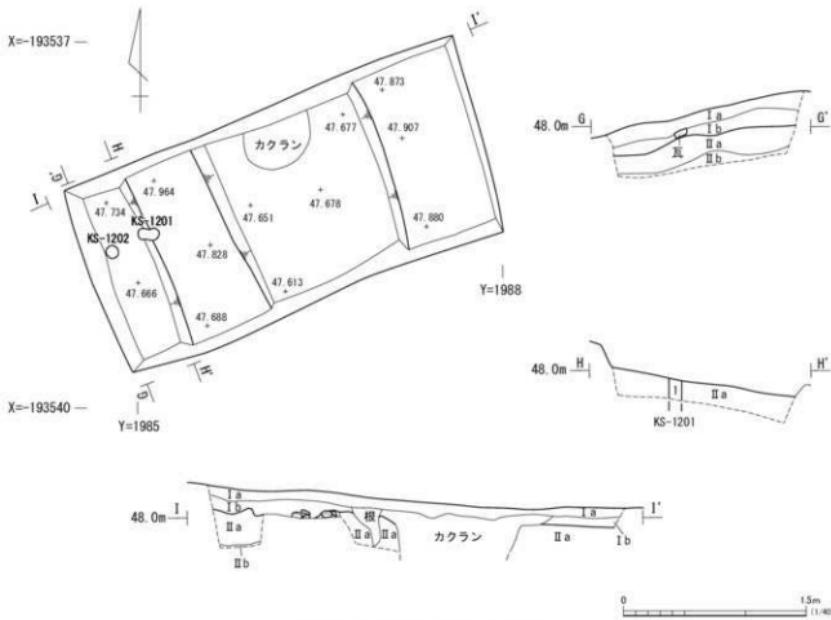
2-3区西部IIa層上面で確認した。堆積土は単層である。平面は円形で、直径11cmである。堆積土から遺物は出土していない。



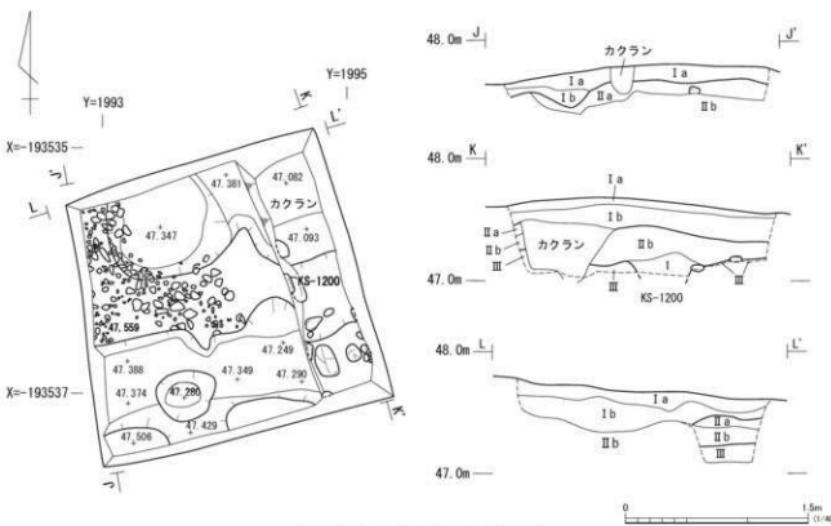
第26図 2-1区平面図・断面図



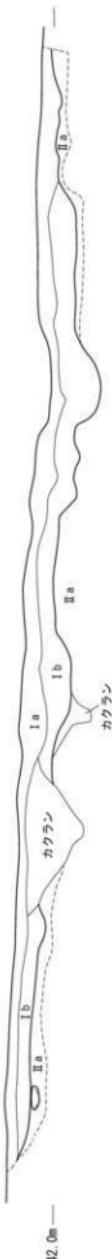
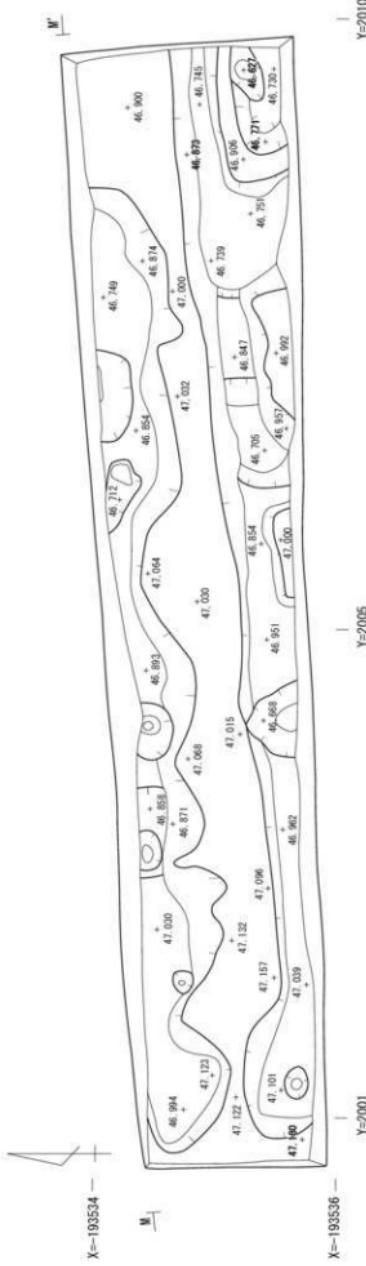
第27図 2-2区平面図・断面図



第28図 2-3区平面図・断面図



第29図 2-4区平面図・断面図



第30図 2-5区平面図・断面図

第12表 2区土層注記表

遺構・層位		土色		土質	土性 しまり	備考
		土色No.	土色			
表土	I a	10YR3/2	黒褐色	シルト	なし	現表土
	I b	10YR3/4	暗褐色	粘性シルト	なし	径1~2cmの礫を含む ピニールを含む
近世の土壌 積み土	II a	10YR5/6	褐色	シルト	なし	径1~5cmの丸礫を多く含む
	II b	10YR6/6	明黄褐色	粘性シルト	あり	径2~10cmの礫を含む 径0.5~1cmの凝灰岩ブロックを含む 酸化鉄粒を含む
近世の土壌 積み土	III	10YR7/6	明黄褐色	粘性シルト	あり	凝灰岩片を含む 酸化鉄粒を含む
KS-1201	1	10YR5/8	黄褐色	シルト	なし	径0.5~1cmの礫を含む 凝灰岩片を含む

(3) 土壌上面の土手状の盛り上がり

2-4区、2-5区で調査区の中心のII a層上面に盛り上がりが見られ、土手状になっていることを確認した。いずれも土壌の方向と平行する。

2-4区では、南部、北部のII a層上面が大きく下がる。土手状の規模は、検出長約166cm、上端幅65cm、下端幅85cm、比高差約25cmである。軸線方向は、N-80°-Eで、調査区外へ延びていている。2-5区では、南部、北部のII a層上面が大きく下がる。規模は、検出長約9m、上端幅80cm、下端幅97cm、比高差約20cmである。軸線方向 N-85°-Eで、調査区外へ延びてている。

5. 出土遺物

(1) 1区

出土した遺物は、瓦3点、レンガ1点である。瓦は、平瓦1点、丸瓦2点が出土している。レンガ(第32図9)は赤レンガで「キ」の印字が見られる。

(2) 2区

出土した遺物は、瓦70点、土師質土器1点である。瓦は、平瓦39点、丸瓦13点、軒丸瓦5点、桟瓦2点、面戸1点、堀瓦8点、その他種別不明の小さい破片が2点が出土した。平瓦は、大半がI層から出土しており、近世の土壌積み土と考えられるII a層およびII b層からそれぞれ1点出土した。丸瓦は、大半がI層から出土し、近世の土壌積み土と考えられるII b層から1点出土した。第31図6は、丸瓦の玉縁部に刻印が確認できる。軒丸瓦は、瓦当文様が三引両文は3点(第31図1・2・4)、三巴文は1点(第31図3)である。第32図8は、厚みが35cmあり堀瓦が想定される。

6.まとめ

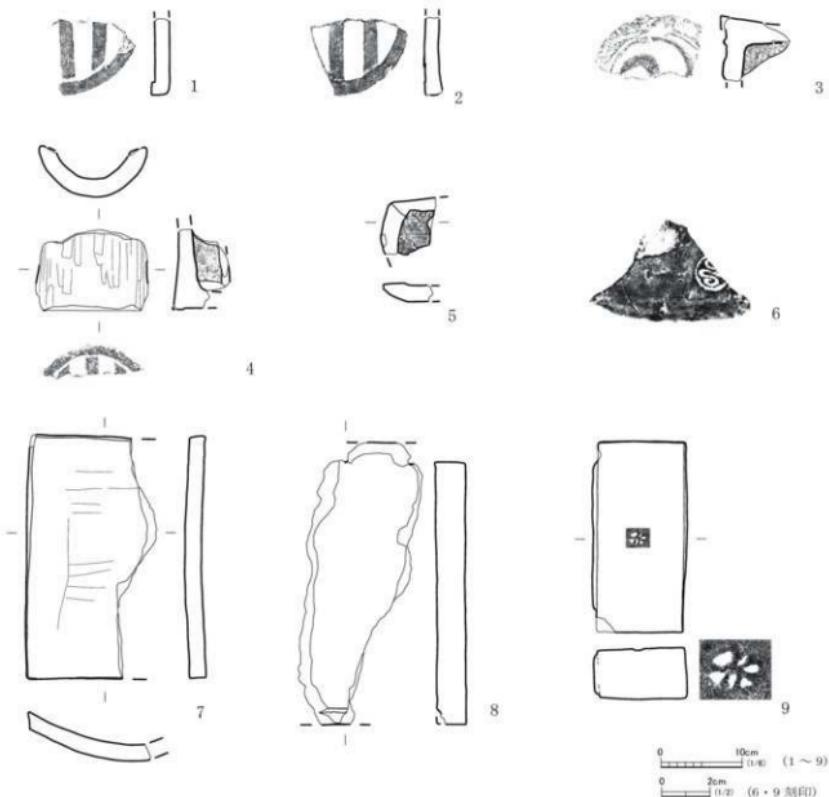
今回の調査では、近世の土壌の積み土と考えられるII層および2-4区で一部断ち割った箇所でIII層を確認した。

土壌上面の柵や堀に係る遺構は検出されなかつたが、II層上面では、1・2区で3基のピットを確認し、土壌の方向と平行する土手状の盛り上がりと、III層上面では、南西方向と北東方向に延びる溝跡を確認した。また、昨年度検出したKS-1170石列(Ⅰ期柵跡)およびKS-1166石列(Ⅱ期柵跡)の延長となる明確な遺構は確認できなかつたため、土壌の痕跡に関しては、今後さらなる調査、検討が必要である。

遺物は、瓦が73点出土している。瓦に関しては、土壌上面でまとまった出土はみられず、大半が表土のI層からである。また、今回の調査区は、近隣に大手門脇橋と西側に登城路があるため、その場所から落下した可能性も十分考えられるため、土壌の痕跡に伴う瓦は、慎重に判断する必要がある。

引用・参考文献

- 仙台市教育委員会『仙台城三ノ丸跡』仙台市文化財調査報告書第76集 1985
- 仙台市教育委員会『仙台城跡14』仙台市文化財調査報告書第479集 2019
- 仙台市教育委員会『仙台城跡15』仙台市文化財調査報告書第485集 2020
- 仙台市教育委員会『仙台城跡16』仙台市文化財調査報告書第493集 2021
- 東北大学理系文化財調査委員会『東北大学理系文化財年報』1990
- 山形市教育委員会『史跡山形城跡発掘調査報告書 二ノ丸土塁』山形市理系文化財調査報告書第39集 2020



第31図 第39次調査(東丸(三の丸)土壘) 出土遺物

第13表 第39次調査(東丸(三の丸)土壘) 出土遺物観察表

区分番号	遺物番号	種別	種類	文様	遺構・層位	法量 (mm)	重さ (g)	備考	写真
1	001	瓦	軒丸瓦	三引両文	2-1区 表探	瓦当径 (86) 内区径 (75) 周縁幅 16 周縁深さ 9 瓦当厚さ 22	180	丸瓦部なし	10-1
2	002	瓦	軒丸瓦	三引両文	2-1区 表探	瓦当径 (115) 内区径 (102) 周縁幅 16 周縁深さ 5 瓦当厚さ 21	245	丸瓦部なし	10-2
3	007	瓦	軒丸瓦	三巴文	2-5区 表探	前幅 (126) 長さ (82) 高さ (-) 厚さ 26 瓦当径 (127) 内区径 (114)	480	巴(左巻き)	10-3
4	006	瓦	軒丸瓦	三引両文	2-5区 表探	前幅 (122) 長さ (98) 高さ 63 厚さ 21 瓦当径 (125) 内区径 (92) 周縁深さ 7	520		10-4
5	005	瓦	面戸瓦		2-5区 I a	幅 (54) 長さ (59) 高さ 22 厚さ 20	90		10-5
6	008	瓦	丸瓦		2-5区 表探	前幅 (-) 後幅 (81) 高さ (100) 厚さ (60) 玉緑先幅 (10) 玉緑先長さ 40	120	刻印あり	10-6
7	009	瓦	平瓦		2-1区 I a	前幅 (118) 後幅 (123) 長さ300 高さ 35 厚さ20	1320		10-7
8	011	瓦	崩瓦		2-1区 I a	幅 (134) 長さ 344 厚さ 35 水切り幅17 水切り深さ (7)	1840	釘穴 2か所	10-8
9	010	レンガ	赤		1区 I b	長さ 225 幅 115 厚さ 62	2460	刻印あり	10-10
写	003	瓦	崩瓦		2-4区 I b	幅 (62) 長さ (202) 脚部高さ (110) 厚さ 20	580		10-9

図版8 第39次(東丸(三の丸)土壙)



1区全景(西から)



1区西壁断面(東から)



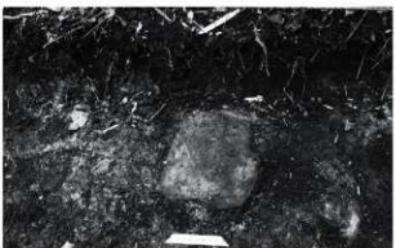
1区KS-1198ピット検出状況(東から)



2-1区南壁断面(北から)



2-1区西壁断面(東から)



2-1区瓦出土状況(東から)



2-2区南壁断面(北から)



2-2区西壁断面(東から)

図版9 第39次(東丸(三の丸)土壙)



2-2区瓦出土状況（東から）



2-3区北壁断面（南から）



2-3区西壁断面（東から）



2-3区KS-1201ピット・KS-1202ピット（南から）



2-3区KS-1201ピット断面（西から）



2-4区北壁断面（南から）



2-4区西壁断面（東から）



2-4区東壁断面（西から）

図版 10 第39次(東丸(三の丸)土壙) 遺物



2-4 区 KS-1200 溝（北東から）



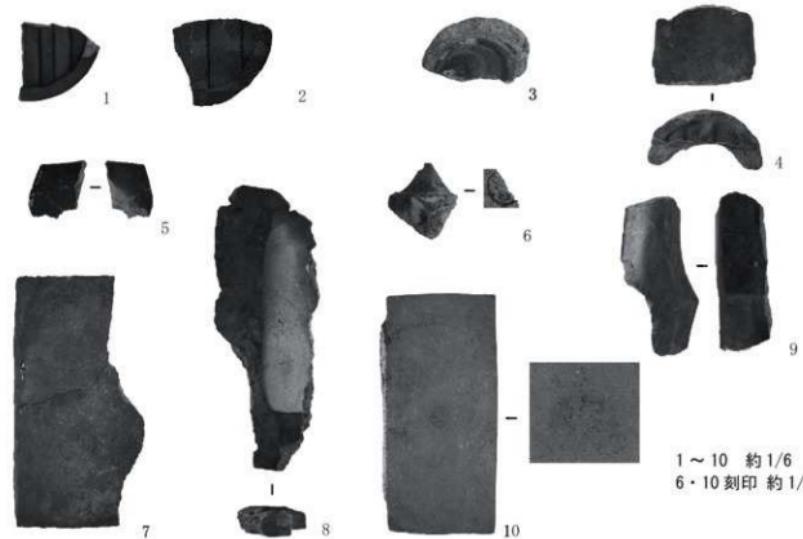
2-5 区 調査前（西から）



2-5 区 全景（東から）



2-5 区 北壁断面（南から）



1～10 約1/6
6・10 刻印 約1/2

VI 第40次調査（扇坂下第1次）

1. 調査の概要

(1) 調査目的

仙台城跡第40次調査（扇坂下第1次調査）は、大手門跡を中心とした二の丸跡や扇坂、中島池跡を含む区域の整備（『史跡仙台城跡整備基本計画』令和2年度策定）に向けた確認調査である。今回の調査は、国際センター駅の西側に位置する仙台市博物館第2駐車場内に調査区を設定し、江戸時代の建物等の遺構確認と千貫沢南岸の検出を目的に実施した。

(2) 調査方法

第40次調査では、調査区を3箇所設定した。1区は仙台市博物館第2駐車場の北西に、2区は1区の北東側に、3区は1・2区の南側に設定した。調査を開始するあたり、災害復旧事業で清水門石垣の測量のために設置された基準点を、巽門跡からトータルステーションを用いて扇坂下に移動し使用した。これらの基準点を基に、それぞれの調査区に1箇所の任意の基準点を設置し、世界測地系座標と標高値を求めた。測量などはそれら基準点を使用した。

調査区設定後、表土および盛土の掘削作業は重機により行った。遺構の平面図は、調査区周辺に設置した基準点を基に、平面図・断面図は縮尺20分の1で作図した。土壟断面図については、任意の基準点を設定して作図し、設定した基準点の座標値を計測し、平面図に合成した。今回の調査では、記録写真にデジタルミラーレス一眼を用いて撮影した。調査区の埋め戻しは、調査区全体を厚さ10cm程度の山砂で覆い、その後、掘削土を転圧しながら埋め、表層には、碎石を敷いて旧状に戻した。

(3) 調査経過

現地調査では、11月8日に1～3区の調査区を設定した。11月12日に重機掘削による現代の盛土除去を完了し、11月15日から人力による精査を開始した。11月17日に断面図・平面図の作製を完了し、11月18日に調査区の全景写真撮影をした。11月19日に埋め戻しを完了し、現地調査を終了した。

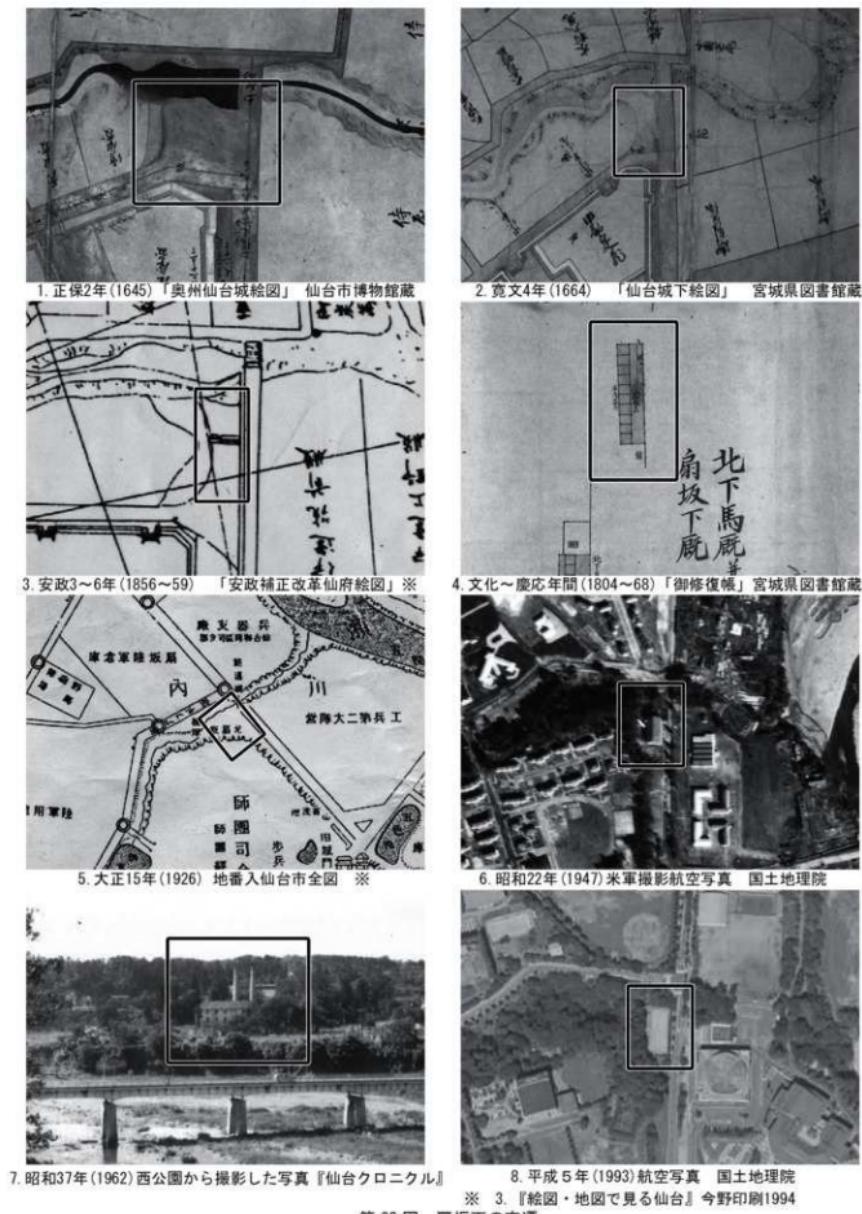
2. 扇坂下の変遷

近世の扇坂下は、扇坂の入口北側の広場を指し、扇坂は二の丸に出仕する藩士の登城口である。城下絵図で最も古い正保2年（1645）の『奥州仙台城下絵図』（図32-1）では、扇坂下の空間は登城路と同じ色で描かれており、扇坂との区別はみられない。また、千貫沢の範囲は、現在の範囲に比べ南側にさらに広がっていたことが窺える。寛文4年（1644）の『仙台城下絵図』（図32-2）では、扇坂下に「下馬」の表記がみられる。安政3～6年（1856～59）の『安政補正改革仙府絵図』（図32-3）では、扇坂下の空間に横長の建物が確認できる。仙台藩作事方が建設・修復を担当した建物台帳の『御修復帳』（図32-4）によると「扇坂下厩」という約2間×10間の建物が描かれており、『安政補正改革仙府絵図』にみられた建物は、扇坂下にあった厩である可能性が高い。近世における扇坂下は、城内（二の丸）に入る登城口の手前にあたり「下馬」として馬をつなぐ場所であったことが窺える。

明治時代以降は、第二師団が仙台城跡に入り、陸軍の管理下となる。第二師団期の扇坂下の土地利用は不明で、大正15年（1926）「地番入仙台市全図」（図32-5）では、扇坂下は「元扇坂」の記載しかみられない。道路の向かいに「扇坂陸軍倉庫」が確認でき、周囲には、陸軍の関連施設が密集していたことがわかる。

終戦直後は、進駐軍が二の丸跡に入り、米軍の管理下となる。昭和22年（1947）の米軍が撮影した航空写真（図32-6）では、煙突がある大型の建物を確認することができ、昭和37年（1962）の古写真（図32-7）にも撮影されており、建物は、米軍の施設の一部で、ボイラープラントであったとされる（『仙台クロニクル』2020）。ボイラープラントは、終戦直後に、米軍が第二師団跡地にキャンプ仙台を整備した際に建設されたと考えられる。古写真から、昭和37年（1962）以降もこの建物は扇坂下にあったことが確認できる。

昭和40～50年（1965～1975）代には、旧仙台商業高校のプールが作られ、平成初期まで利用されていた（図32-8）。その後、仙台市博物館第2駐車場として現在に至る。



第32図 扇坂下の変遷

3. 基本層序

大別3層、細別16層の基本層を確認した。I層は現代の盛土、II層は近現代の盛土、III層は千貫沢が埋まつた堆積土の可能性がある。

I層（現代の表土・盛土）

11層に細分した。現代の盛土である。昭和50年代以降のプール解体時の盛土および博物館第2駐車場の整地土と表層の碎石層となる。ビニールやコンクリート片を多く含む。

II層（近現代の盛土）

3層に細分した。焼土が多量に含むことから第2次世界大戦直後の盛土と考えられる。IIa層は、炭化物を多量に含むにぶい赤褐色の焼土が主体で、戦後処理で出た排土を盛土したものと考えられる。IIa層から耐火レンガが大量に出土している。

III層（近世か近代の整地土）

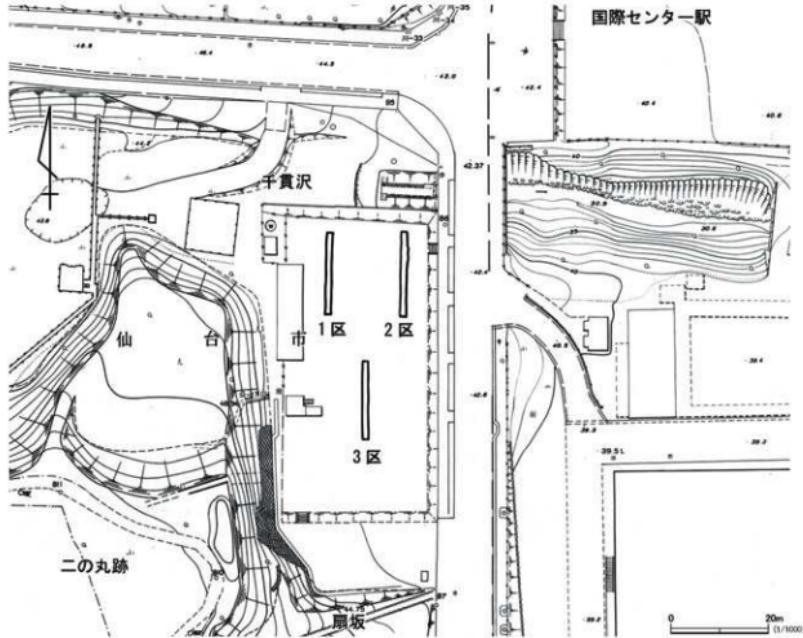
2層に細分した。黒褐色の粘質土が主体である。III層の確認した範囲は、千貫沢の南側にあたり、千貫沢を人為的に埋めた整地土の可能性がある。IIIa層は、黒褐色粘質土が薄く水平に堆積し、旧表土の可能性がある。遺物は出土していない。

4. 検出遺構

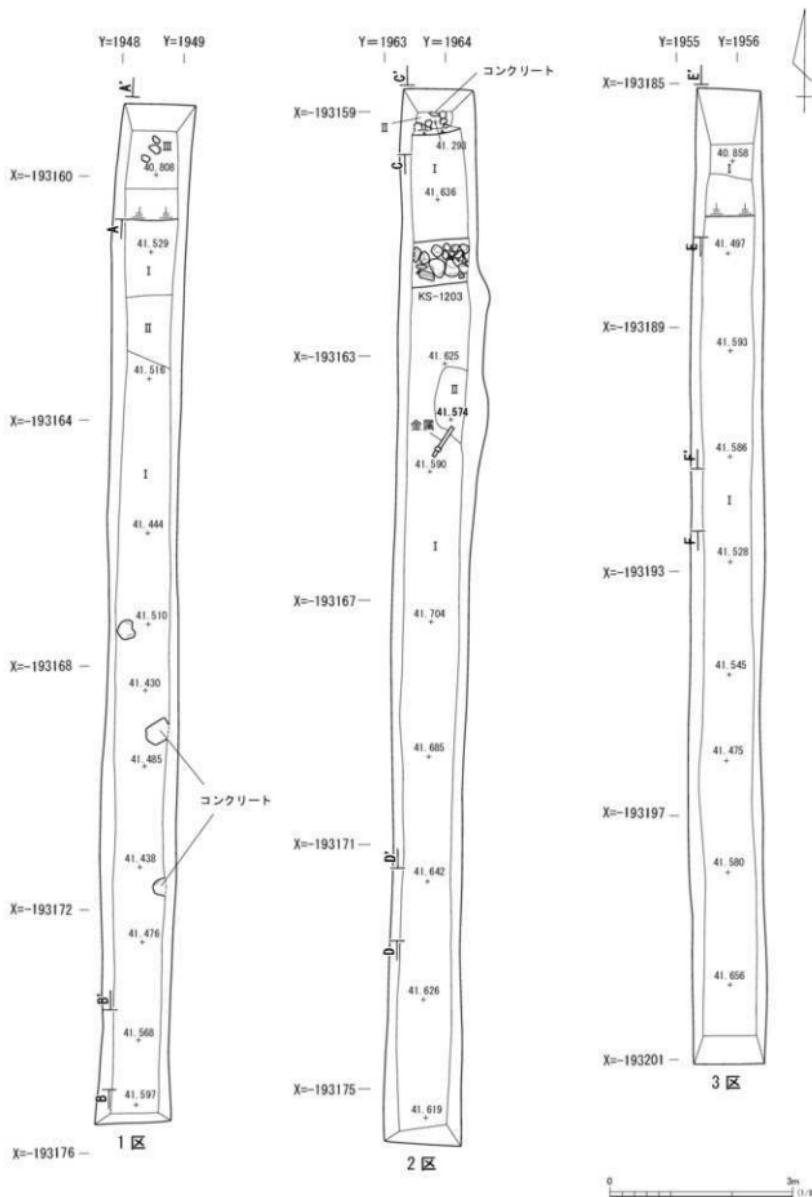
(1) 集石遺構

KS-1203

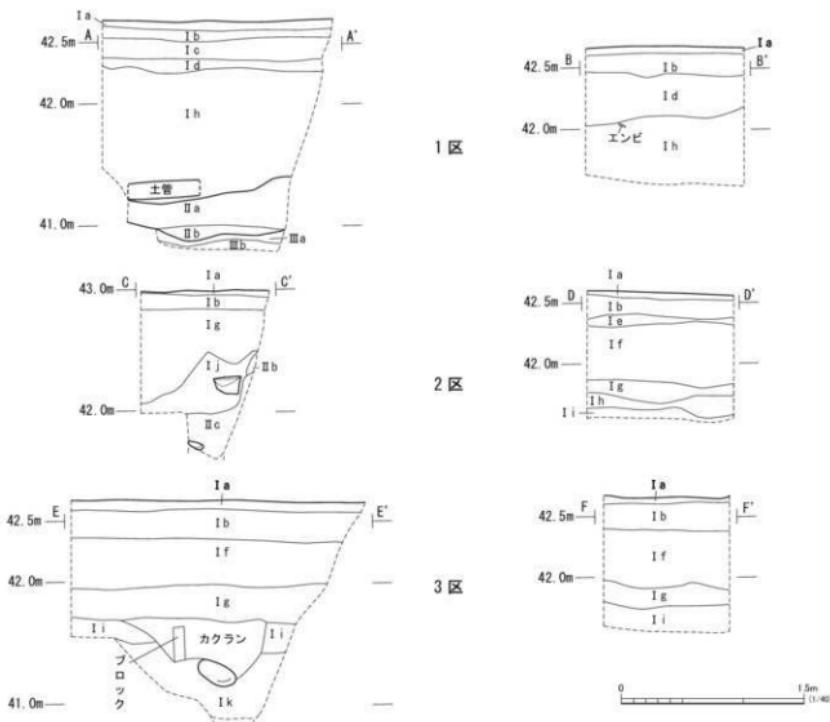
2区北部のIh層中で確認した集石である。径5~33cmの玉石が使用されている。集石の範囲は東西92cm、南北73cmで、さらに調査区外に東西方向に延びると考えられる。遺物は出土していない。暗渠と思われる。



第33図 扇坂下1次調査区配置図



第34図 扇坂下1次 平面図



第35図 扇坂下1次断面図

第14表 第40次調査(扇坂下) 土層注記表

遺構・層位	土色		土質	土性 しまり	備考
	土色No.	土色			
現代の表 土・盛土	I a	10YR2/2	黒褐色	シルト	なし
	I b	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト	なし
	I c	2.5Y7/3	浅黄色	シルト	なし
	I d	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	あり
	I e	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト	あり
	I f	2.5Y1/8	灰白色	纏	なし
	I g	2.5Y5/4	黄褐色	砂質シルト	あり
	I h	2.5Y5/3	黄褐色	砂質土	あり
	I i	2.5Y3/1	黒褐色	纏	なし
近・現代の 盛土	I j	10Y8A/3	にぶい黄褐色	シルト	あり
	I k	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質土	あり
逝世か近代 の整地土	II a	2.5YR4/4	にぶい赤褐色	砂質シルト	なし
	II b	10YR3/1	黒褐色	シルト	あり
	II c	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	あり
逝世か近代 の整地土	III a	10Y8Z/3	黒褐色	粘質土	あり
	III b	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	あり

5. 出土遺物

(1) 陶磁器

陶磁器は、合計2点出土した。図版12-25は、明治時代以降の印判の染付皿である。

(2) 瓦

近世の瓦は、合計9点出土した。このうち丸瓦が3点、平瓦が6点出土している。いずれもⅠ層中から出土している。

(3) レンガ

レンガは、調査区で大量に出土し、その中でも刻印のある状態の良いものを合計116個採取した。このうち耐火レンガが110点と赤レンガ6点出土している。大半がⅡa層から出土している。刻印の種類と各数量は、レンガ集計表(第15表)にまとめた。

「SHINAGAWA」の刻印(第36図1~5、図版12-1~5)があるものが最も多く29点出土している。刻印上部の菱形内に「S,S」の刻印がみられる。中には、「SHINAGAWA」の下部に「N2」「N3」と粗く印字されているレンガも確認できる(第36図2・3、図版12-2・3)。「SHINAGAWA」銘のレンガは、明治36(1903)年創業の東京都にある品川白煉瓦株式会社の製品であると考えられる。次に出土量が多いのは、「SHOWAYOGYO」の刻印(第36図6~9、図版12-6~9)があるもので、11点出土している。刻印上部の菱形内に「S,Y,K」の刻印がみられるレンガも確認している。「SHOWAYOGYO」銘のレンガは、昭和15(1940)年創業の昭和窯業株式会社の製品と考えられる。第36図14・19・20でみられる「SK」は、耐火度を示しており、明治後期に現れる。その他、判読が困難なものを除き全体で10種類の刻印を確認した。

第15表 耐火レンガ 集計表

刻印名	個数	会社名	所在地	製造年	備考
SHINAGAWA	29	品川白煉瓦株式会社	東京都	明治8年(1875)~	下部に「N」表記2点あり
SHOWAYOGYO	11	昭和窯業株式会社	東京都	昭和15年(1940)~	△形マーク2点あり
N,S,K	3				「SK34」(耐火度)表記2点あり
N,Y,K	3				
N,T,R	1				「SK」(耐火度)表記あり
IVK	1				
MUNO	1	美濃窯業株式会社	岐阜県	大正7年(1918)~	
OYT	2	大阪窯業耐火煉瓦株式会社	大阪府	昭和11年(1936年)~	
日並(?)	1				
NIHONYOGYO	2	日本窯業			
不明	56				

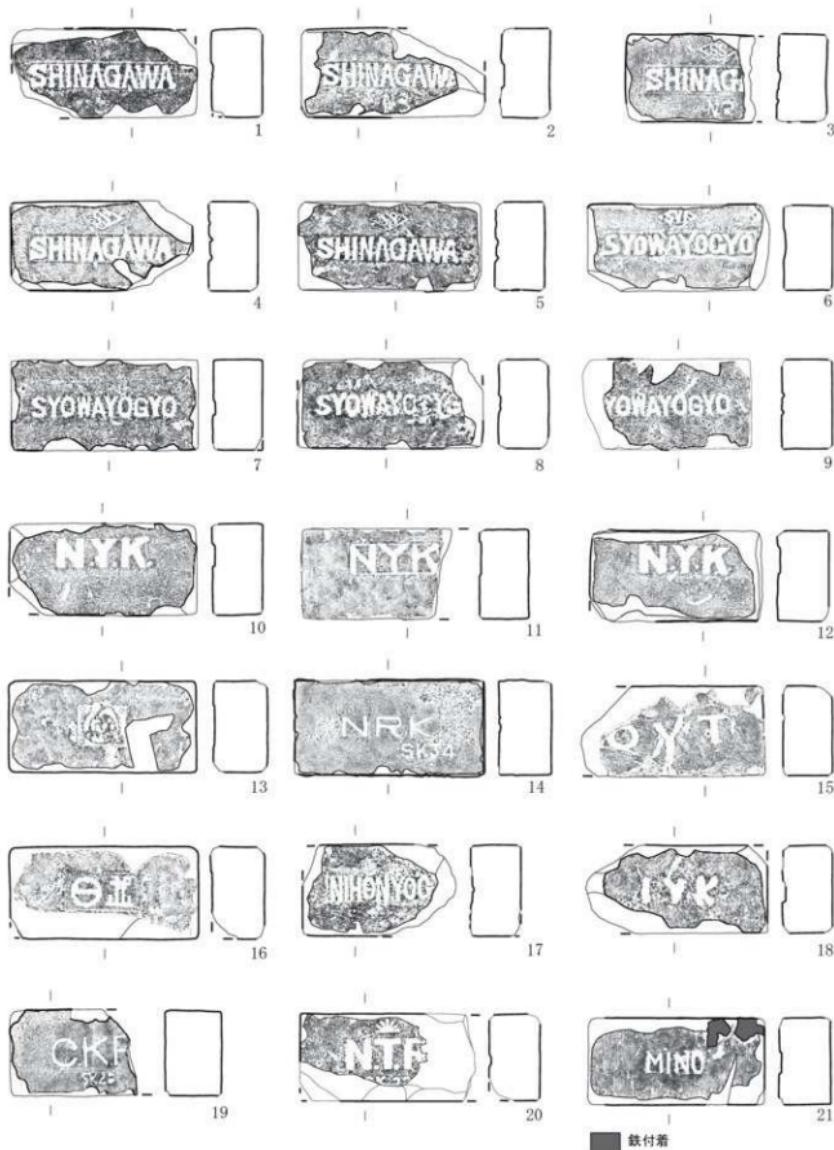
一覧表の作成には『耐火煉瓦の歴史』を参考にした。

6.まとめ

今回の調査では、調査区全域で厚さ1.3m~1.5m以上の現代の盛土が見られ、近世の可能性のあるⅢa層上面は、地表から約1.7m下にあることが判明した。上層の盛土の大半が、昭和40年(1965)代以降のブルー解体時の盛土と駐車場の整地土である。千貫沢の南岸にあたる位置で確認した1区北部のⅢ層が、人為的に沢を埋めた際の盛土である可能性が考えられる。その直上に堆積する耐火レンガが大量に含む焼土(Ⅱa層)に関しては扇坂下北部でのみ確認しているため、近代に千貫沢を埋めた際の盛土の可能性がある。

今後は、近世の可能性が高いⅢa層上面の広がりを確認し、千貫沢南岸の落ち込みや、近世の遺構を確認することが課題と言える。

遺物は、刻印がある耐火レンガが大量に出土した。最も出土量の多い「SHINAGAWA」印字のレンガは、明治期に品川白煉瓦株式会社で作られた通称「品川煉瓦」と呼ばれた耐火レンガで、味噌醸造工場窯(仙台坂遺跡)・茨城県シャトーカミヤ旧醸造施設など関東を中心に出土例がみられ、いずれも炉跡、ガス、醸



第36図 第40次調査(扇坂下) 出土遺物

第16表 第40次調査(扇坂下) 出土遺物観察表

区分番号	遺物番号	種別	種類	刻印・文様	遺構・層位	法量(mm)	重さ(g)	備考	写真図版
1	054	レンガ	耐火レンガ	「SHINAGAWA」	I区 IIa	長さ 228 幅 109 厚さ 63	2000	刻印上部に菱形マークあり	12-1
2	076	レンガ	耐火レンガ	「SHINAGAWA」 〔N〕	I区 IIa	長さ 225 幅 110 厚さ 61	1990	刻印上部に菱形マークあり	12-2
3	083	レンガ	耐火レンガ	「SHINAG」 〔N2〕	I区 IIa	長さ (160) 幅 108 厚さ 62	1600	刻印上部に菱形マークあり	12-3
4	023	レンガ	耐火レンガ	「SHINAGAWA」	3区 IIa	長さ 223 幅 110 厚さ 61	2260	刻印上部に菱形マークあり	12-5
5	101	レンガ	耐火レンガ	「SHINAGAWA」	I区 IIa	長さ 225 幅 110 厚さ 62	2420	刻印上部に菱形マークあり	12-4
6	635	レンガ	耐火レンガ	「SHOWAYOGYO」	I区 IIa	長さ (223) 幅 104 厚さ 60	2210	刻印上部に菱形マークあり	12-6
7	104	レンガ	耐火レンガ	「SHOWAYOGYO」	I区 IIa	長さ 230 幅 110 厚さ 62	2610		12-7
8	008	レンガ	耐火レンガ	「SHOWAYOGYO」	3区 IIa	長さ 234 幅 109 厚さ 62	2410		12-8
9	064	レンガ	耐火レンガ	「YOWAYOGYO」	I区 IIa	長さ (207) 幅 110 厚さ 63	2280		12-9
10	116	レンガ	耐火レンガ	「N.Y.K」	I区 IIa	長さ 232 幅 113 厚さ 62	2665		12-10
11	099	レンガ	耐火レンガ	「N.Y.K」	I区 IIa	長さ (184) 幅 110 厚さ 61	2020		12-11
12	001	レンガ	耐火レンガ	「N.Y.K」	2区 IIa	長さ 213 幅 112 厚さ 64	2460		12-12
13	027	レンガ	耐火レンガ	不明	2区 IIa	長さ 232 幅 112 厚さ 67	2960		12-13
14	029	レンガ	耐火レンガ	「NRK」「SK34」	IIa	長さ 235 幅 117 厚さ 65	3200		12-14
15	084	レンガ	耐火レンガ	「OYT」	I区 IIa	長さ (225) 幅 110 厚さ 61	2260		12-16
16	072	レンガ	耐火レンガ	「日並」か	I区 IIa	長さ 231 幅 114 厚さ 67	2790		12-18
17	091	レンガ	耐火レンガ	「NIHONYOG」	I区 IIa	長さ (189) 幅 112 厚さ 62	1720		12-19
18	077	レンガ	耐火レンガ	「YK」	I区 IIa	長さ (224) 幅 107 厚さ 62	2240		12-22
19	068	レンガ	耐火レンガ	「CK □」「SK28」	I区 IIa	長さ (171) 幅 105 厚さ 70	1725		12-24
20	007	レンガ	耐火レンガ	「N.T.R」「SK」	3区 IIa	長さ (215) 幅 107 厚さ 63	2200	刻印上部に放射状のマークあり	12-23
21	081	レンガ	耐火レンガ	「MINO」	I区 IIa	長さ 217 幅 107 厚さ 64	2660		12-21
写	041	レンガ	耐火レンガ	「NIHON」	I区 IIa	長さ (115) 幅 105 厚さ 60	1150		12-20
写	030	レンガ	耐火レンガ	「RK」「SK」	IIa	長さ 230 幅 117 厚さ 65	3215		12-15
写	088	レンガ	耐火レンガ	「OYT」	I区 IIa	長さ (171) 幅 108 厚さ 60	1640		12-17
写	122	磁器	染付	梅花文	2区	口径 (-) 底径 (50) 高さ (14)			12-25
写	126	錠鉄			2区 I	径 15 長さ (19)	10		12-26

造用窯で使用されていたレンガである。「品川煉瓦」は、平面に格子状の文様が施され、「SHINAGAWA」印字上部に「△内にS.S」の刻印があるのが特徴であり、「△内にS.S」の刻印は、明治32年の商標登録後の製品である(中野2014)。扇坂下で出土した「SHINAGAWA」銘のレンガは、ほぼすべてに「△内にS.S」の刻印がみられるため、商標登録後の明治32年(1899)以降であり、また、大正13年(1924)以降のJIS規定以前の寸法に該当することから、明治32年(1899)～大正13年(1924)の間に製造された可能性が高い。

また、扇坂下出土の「SHINAGAWA」印字のレンガは、格子状の文様がみられず、下部に「N」表記が確認できるなど、東京や関東周辺で出土しているレンガとは様相が異なり、地方の工場で生産されたレンガの可能性も考えられる。品川白煉瓦会社は、東京以外の各地でも生産されており、明治期前半に福島県の小名浜、湯本、赤井の3ヶ所と、明治37年(1907)には、大阪にも工場があったとされる(水野1991)。扇坂下で出土した耐火レンガは、「品川煉瓦」以外にも、昭和15年(1940)以降の「SHOWAYOGYO」銘のレンガも出土していることから、明治期から昭和期までの間、耐火レンガを使用した第二師団関連の建物が扇坂下ないし近隣に存在していたことが考えられる。

引用・参考文献

- 風土誌編集部『山台タロニクル 次代に残したい、昭和の山台』2020
竹内清和『耐火煉瓦の歴史 -セラミック史の一断面-』内田老舗園 1999
中野光徳『東京における耐火煉瓦の基礎的考察 -遺構出土の明治時代の耐火煉瓦を中心として-』『月刊考古学ジャーナル12』ニューサイエンス社 2014
水野信太郎『日本近代建築史 落葉瓶』日本芸術実業説文5巻 祐善社株式会社 1991
牛久市教育委員会『平成25年度牛久市内遺跡発掘調査報告書』牛久市文化財調査報告第11集 2013

図版 11 第 40 次(扇坂下)



1区西壁断面(東から)



1区サブレンチ西壁断面(東から)



1区Ⅱ層・Ⅲ層検出状況(南から)



2区西壁断面(東から)



2区サブレンチ西壁断面(東から)



2区KS-1203集石検出状況(東から)

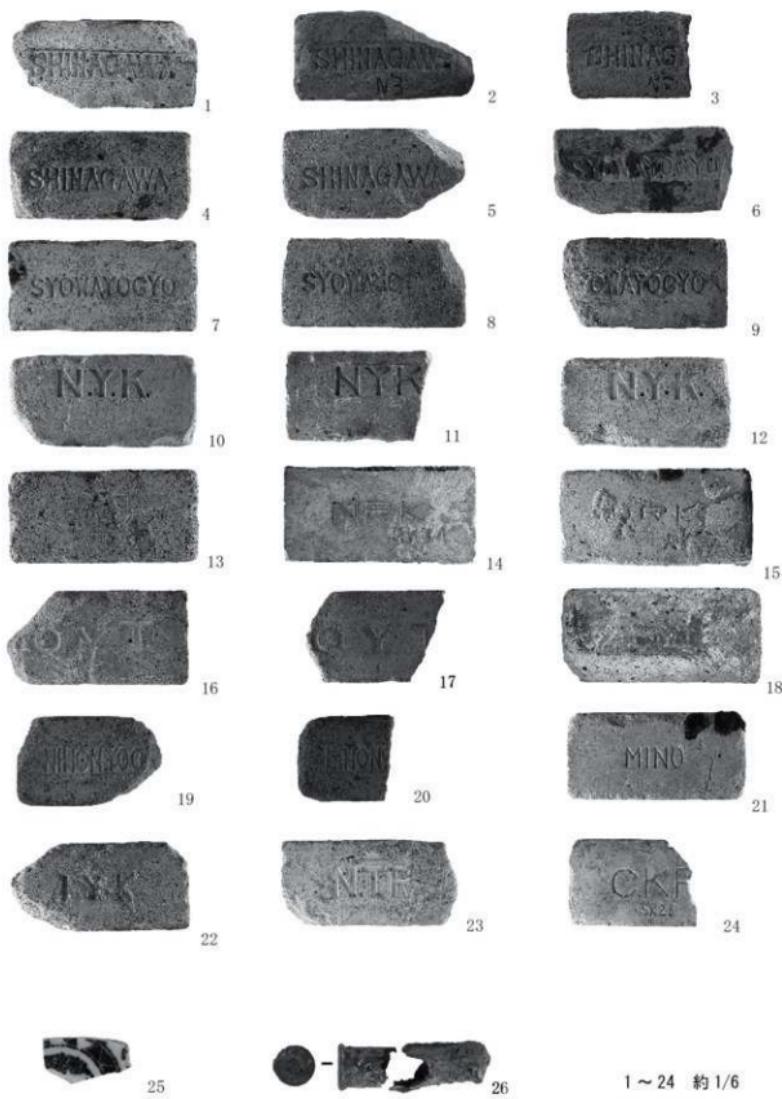


3区西壁断面(東から)



3区サブレンチ西壁断面(東から)

図版 12 第 40 次(扇坂下) 遺物



1 ~ 24 約 1/6

25 約 1/3

26 約 1/2

VII 第41次調査（清水門井戸石垣・翼門西側石垣）

1. 調査の概要

(1) 調査目的

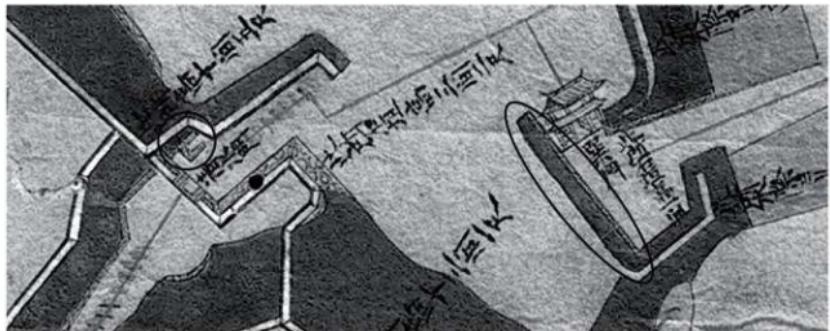
第41次調査では、翼門跡から沢門跡へと至る登城路跡周辺に存在する石垣の現況確認および今後の登城路跡整備の基礎的なデータ収集を目的に、測量調査を行った。対象とした石垣は、清水門跡下にある石組み井戸跡の三方を囲む清水門井戸石垣と造酒屋敷の曲輪下にある翼門西側石垣の2箇所である。なお、清水門井戸石垣は、平成13年度の第2次調査で測量調査を行っており（『仙台城1』）、その際には写真測量とレーザー測量を行っている。

(2) 調査方法と調査経過

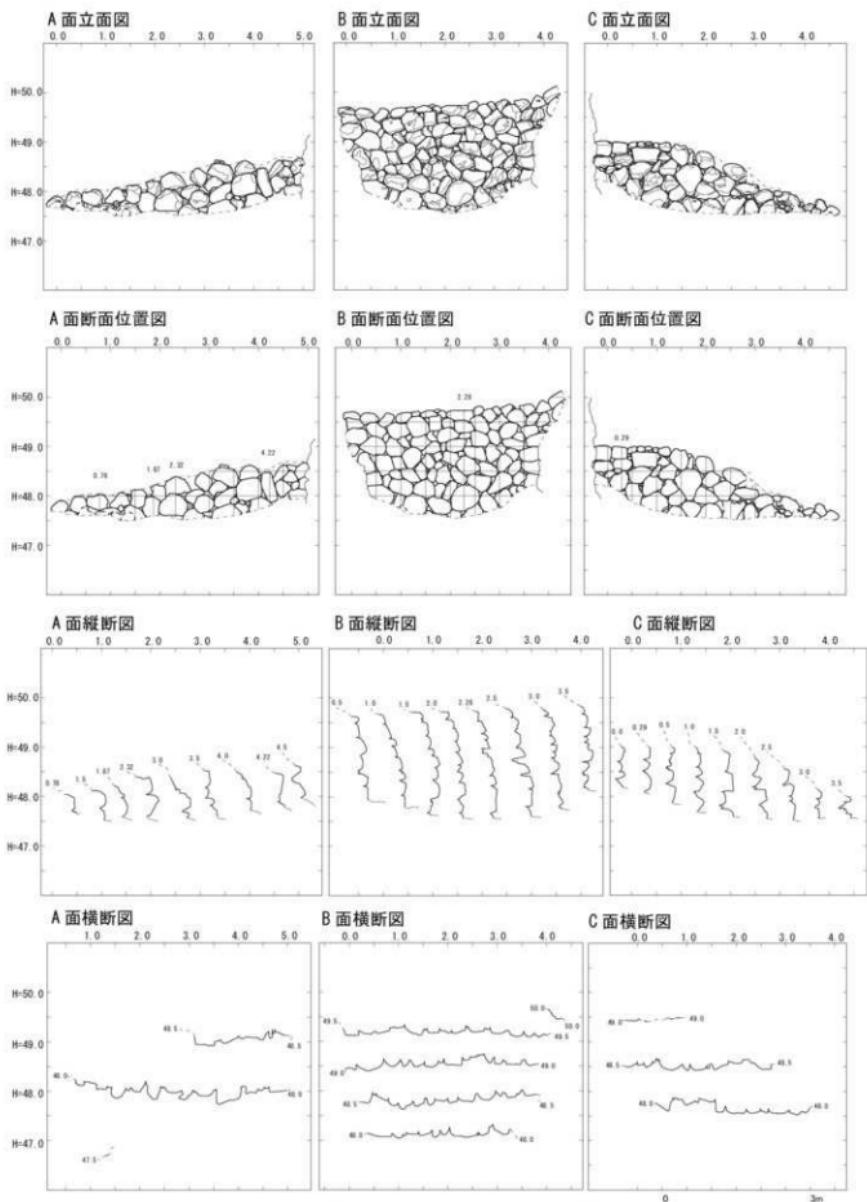
今回の調査は、井戸石垣の3面と翼門西側石垣の2面が対象で、立面積は合計 58 m²である。調査を開始するにあたり、基準点として災害復旧事業で清水門石垣の測量のために設置された基準点を確認して使用した。測量作業は、8月1日から石垣の清掃作業および周辺の除草作業を行い、9月17日に基準点確認のための測量を行った。基準点の座標および標高にズレが無いことを確認した上で、9月17日から石垣のレーザー計測に入り、石垣の三次元情報を取得した。



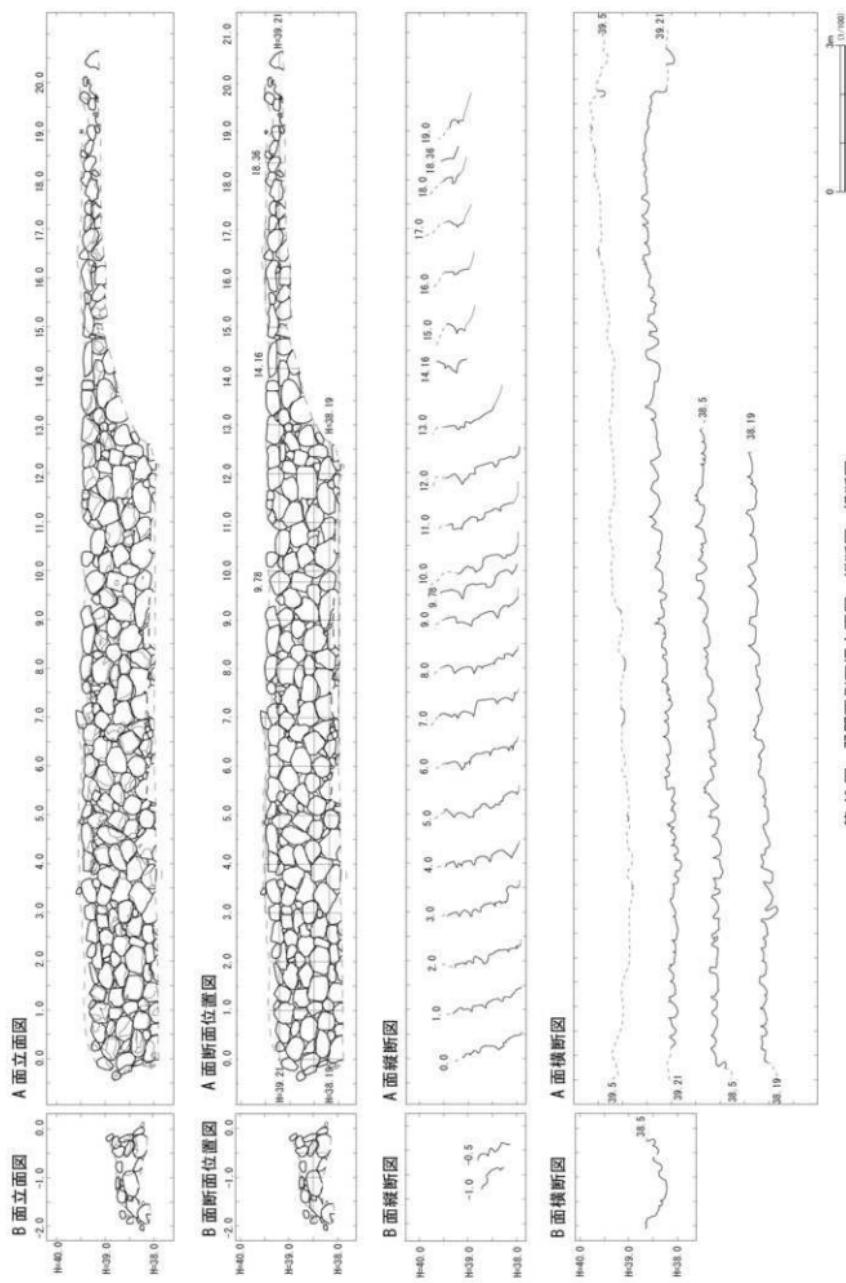
第37図 翼門跡・清水門跡周辺の現況地形図と調査地



第38図 「奥州仙台城井戸城下絵図」(部分)天和2年(1682)宮城県図書館所蔵



第39図 清水門井戸石垣立面図・縦断図・横断図



第40図 巽門西側石垣立面図・縦断図・横断図

2. 測量成果

（1）清水門井戸石垣

清水門井戸石垣は、総延長は 38.2m(A面 : 5.1m, B面 : 4.4m, C面 : 5m) であり、現地表面から最大で 8段分（高さ 2.2m）が確認できる。築石に使用される石材はほとんどが自然石で、一部、石の表面を加工した石材が見られる。A面・C面の天端は東側にかけて欠損がみられる。

震災以前に実施された平成13年度の測量と比べ、築石や間詰石の欠損は認められなかったが、B面の縦横断面図をみると中心部が前にせり出し、石垣の膨らみ（はらみ出し）が認められた。崩落の危険性がある変状である。

測量成果から個別の石垣面について見ていくと、A・C面は、築石の横幅が 50 cm の石材が主体で、築石との間には玉石の間詰石が観察される。B面は、築石の横幅が 40 ~ 50 cm が主体で、中心部にかけて小振りな石材が多い。

積み方の特徴としては、自然石が主体の乱積みである。全的に石材は小振りである。

清水門井戸石垣の中には、直径 1.2m ほどの石組みの井戸があり、現在は埋没し全容は確認できないが石組上面の一部が露出している。また、正保 2 年（1645）『奥州仙台城絵図』に清水門下に井戸が描かれており、近世初期からこの地に井戸があったことは推測される。石垣の修復履歴については、絵図・史料からは、確認できない。

（2）翼門西側石垣

翼門西側石垣は、総延長は 115.5m(A面 : 105m, B面 : 1.5m) であり、現地表面から最大で 6段分（高さ 1.6m）が確認できる。築石に使用される石材はほとんどが自然石である。天端石は、一部欠損箇所がみられる。A面北端部は崩れしており、北半部延長 8m、高さ約 1m の範囲は盛土により覆われている。A面南半部の地面部分はコンクリートで固められている。B面は当初 A面に連続した向きであったことが想定され、近代の階段設置の際に背面が押されて動いたと考えられる。

測量成果では、築石の横幅は 40 ~ 50 cm の石材が主体で、築石との間には横幅 5 ~ 30 cm の大小様々な間詰石が観察される。大きな変状箇所はみられない。

積み方の特徴としては、自然石が主体の乱積みである。石垣の修復履歴は、元禄 7 年（1694）の「修復窓絵図」のみ確認でき、翼門より南側の天端付近を修理している。近代以降は、翼門より南側の石垣は、階段および道路工事に伴う堆積土により一部埋没している。

3.まとめ

今回、登城路の清水門井戸石垣と翼門西側石垣の現況測量を実施し、石垣修復の際に基礎となるデータを取得することができた。測量成果から、翼門西側石垣では大きな変状は認められなかったが、清水門井戸石垣で石垣の膨らみ（はらみ出し）が認められた。今後、日常的な経過観察を実施するとともに、安全性の詳細調査を継続する必要がある。

翼門跡から沢門跡へと抜ける登城路跡は、築城期の大手道とする考えもあり、今後、測量も含め発掘調査を継続し、石垣の修復履歴や構築年代を明らかにしていくことが課題である。

引用・参考文献

- 越後期城郭研究会『織田信長城郭資料集成 V 戦国・織田信長の石垣』2019
- 仙台市教育委員会『仙台城 I』仙台市文化財調査報告書第 259 集 2002
- 仙台市教育委員会『仙台城本丸跡 I 次調査 第 2 分冊 遺構編』仙台市文化財調査報告書第 298 集 2006
- 仙台市教育委員会『仙台城跡東日本大震災復旧事業報告書 第 2 分冊』仙台市文化財調査報告書第 451 集 2016
- 文化庁文化記念物調査報告書『石垣整備のてきぎ』同成社 2015

図版 13 第 41 次 (清水門井戸石垣・翼門西側石垣)



報告書抄録

仙台市文化財調査報告書第500集

仙 台 城 跡 17

— 令和3年度 調査報告書 —

2022年4月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区上杉一丁目5番12号

仙台市役所上杉分庁舎

文化財課 TEL 022 (214) 8544

印刷 株式会社 仙台紙工印刷

宮城県仙台市宮城野区若竹三丁目1-14

TEL 022 (231) 226 (代)
